



おばあちゃん への贈り物

田中かわず

おう、ひろくんか。久し振りやなァ。ちょっと見ん間にいい兄ちゃんになってきたやんか。まァ、元気そうでなによりや。咲子は元気にしてるか？ そうか、そりゃよかった。咲子はわしより3つ年下の妹やが、だんなを早う亡くして、女手一つでひろくんをここまで大きゅうしてきたんや。我が妹ながらよう頑張ってるなァ思うわ。

わしか？ わしは浪花県を退職してから5年になるけど、まだまだ、ほれこの通り元気やで。今は何をしてるんかって？ そうやなァ。家ん中では濡れ落ち葉もええとこやけど、これでも結構毎日忙しいんや。

平日の月曜日から木曜日までは午後3時間ほど高山市役所で働いてるし、金曜日は北大阪なにわ川柳会で下手な川柳をひねらんとあかんし、土日は、ほら、老人ホームの慰問団に加わって、物まねを披露してる。

ひろくんは知らんやろけど、これでも結構「物まねの河童」といやァ、その筋では知られた存在なんや。最近釣りは日記のハマちゃんの物まねがハマリ役でな。

「おおっ！ スーさん、かかっている、かかっている。これはでかいぞ。そうそう、それぞれ、その調子。あかん、あかん、そんなに強うリールを巻いたらあかん！ 何してんの、スーさん！

さっきから強う巻いたらあかん言うてるやろ！ それじゃバレてまうで。あ～あ、言わんこっちゃない。やられてもうた。もう～、スーさんはこれやからダメなんや。お師匠さんとして恥ずかしいわ」

てな具合や。え？ ハマちゃんが大阪弁でしゃべるんは変やて？ そこはわしの腕の見せどころやないか。西田敏行言うたら探偵ナイトスクープの探偵局長もしてて、なんとこの関西人っぽいキャラしてるやろ。そんで、ハマちゃんに大阪弁をしゃべらしたら、これがまた皆に受けるんや。

ところで、咲子から聞いてびっくりしたんやけど、ひろくんはこの4月から公営住宅課に配属されるそうやないか。しかも滞納整理班いうから2度びっくりや。ひろくんは市に入ってから何年になるねん？ ほう、10年か。そりゃまた、3度びっくりやな。

実はな、何を隠そう、このわしも、市に採用されてから10年目に公営住宅課の滞納整理班に配属されたんや。今から遡ること30数年前、昭和48年のことや。懐かしいなァ。市には40年近く勤めたけど、今、思い出してもあの頃が1番懐かしい。

今日は時間があるんやろ？ そうか、それやったらちょうどいい機会や。年寄りの雑言も、ひよっとすると何かの参考になるかもしれん。あの頃の思い出話をビールでも飲みながらちょっとしよか。え？ 肝臓が悪かったんやないんかって。かまへん、かまへん。まだちょっと早いけど、わしももういつお迎えがきてもいい年頃になってきたからな。ま、かあさんに叱られんように、ちょびちょびやりながら話をしようやないか。

お～い、かあさん、ひろくんはビール持ってきてんか。コップは1つやないで、2つやで。



わしが浪速市に採用されたんは昭和38年のことや。それから2、3の職場を経験してから公営住宅課に配属されたんが、市に採用されてから10年後、昭和48年のことやった。

世間では石油ショックが起こって、スーパーからトイレットペーパーがのうなってしもてな。そりゃア、みんな大変やった。スーパーの前にトイレットペーパー買いに長蛇の列ができたもんや。

小松左京の日本沈没がベストセラーになったんもこの年やったな。それまでの高度経済成長にいろんなとこで陰りが見え始めて、まア、一言で言うたら爛熟の時代やった。

思い起こしたら、映画では仁義なき戦いやポセイドンアドベンチャーなんてのがヒットして、人は刺激の強いもんばかり求めて、どこかに退廃の臭いを嗅ぎつけ始めてた言う気がする。世間全体が熟れ切ってたんやろなア。まア、そんな時代やった。

わしはこの年、公営住宅課の滞納整理班に配属されたんやが、この班はわしが配属される2年前に新しゅう組織された部署やった。

その頃の市営住宅の家賃いうたら、木造住宅が1月7～8千円、鉄筋でも1月2～3万円と安かったんやが、それでも滞納があとを絶たんかった。なんぼ景気がいい言うてもその恩恵はなかなか末端まで届かんからな。

けど、その当時の家賃督促いうたら、督促葉書を月に1回住宅に投函するぐらいで、あとは野放し状態やったから、100ヶ月から150ヶ月も滞納してる入居者が何10人もいた。世間は景気がよくて税収も右肩上がりやったから、滞納家賃ぐらいほっといても、別に市の財政に何の影響もなかったんや。

けど、これをほっといたら入居者間に不公平を招くことになる。そこを市議会に指摘されてな。いかに公営住宅いうても、100ヶ月からその上も家賃を滞納してる居住者を放置するんは行政の怠慢以外の何物でもない言う訳やな。

議会から指摘を受けたら行政は現金なもんでな。特に浪速市の役人は昔から議会の先生には弱い。すぐに長期家賃滞納者の対策チームが組織された。それが滞納整理班や。班長以下5人。その仕事は、言わずと知れたこと、家賃の支払に応じない長期滞納者を強制的に退去させることやった。

今は随分変わってしもてるやろけど、当時の強制執行のやりかたはだいたいこんな風やった。

まず長期滞納者を相手に家賃支払い住宅明渡訴訟を裁判所に提起する。家賃を滞納してる事実を争う滞納者はほとんどいてへんから、裁判所は1～2回の口頭弁論で簡単に判決を出す。その判決を債務名義にして、債務名義言うんは判決に強制執行をしてもええ言う裁判所のお墨付きのついたんを言うんやが、そんでもって裁判所に強制執行を申し立てる。裁判所はこの申立てを受けて強制執行を開始するんや。

そんで、まずは家財道具の差押や。執行官が滞納者の家に強制的に入って、家財道具に差押の札を貼りつける。その昔は赤紙やったらしいけど、わしらんときはあんまり目立たんように家財道具の裏側に小さな張紙を執行官が貼り付けてたな。

そんで、滞納者が執行期日までに家賃を支払わなんだら、執行期日に強制的に家財道具を家から持ち出して住宅を空っぽにするんや。そしてその場で差し押さえた家財道具一切を即時競売して、その代金を滞納家賃の一部に充当する訳やな。

そりゃア、安いで。買うときには何10万円もしてた家財道具やテレビなんかの電化製品も、その場で競売したら二束三文やからな。家財と電化製品全部合わせて、ええとこ5万から6万円ぐらいやったな。

まア、執行官はお飾りで、差押の段取りから競売まですべてを仕切る強制執行専門の業者がいてな、事実上の強制執行はこの業者がやってた。浪速市の場合は有池商事株式会社がその強制執行の業者やったな。

有池商事は、高校を卒業して大阪府警に10数年勤めた後にこの世界に新天地を求めた有池社長がすべてをしきる個人会社やった。わしが滞納整理班に配属されたとき、社長は60歳代半ばでな、この道30年のベテランとして大阪のこの業界では押しも押されぬ存在やった。

警察時代には、柔道で大阪代表として国体にも出場したほどの猛者やったけど、この世界に入ってからというもの、毎晩毎晩、キタやミナミのネオン街で乱痴気騒ぎを繰り返して、わしと知り合った頃には、その鍛え上げた体がブヨブヨの贅肉に変わり果ててたなア。酒を飲みすぎてアル中状態でな、酒が切れたら手がブルブル震えて字も書かれへんのや。わしは、よう社長に頼まれて領収書なんかには社長のサインをしたもんやった。

けど、いったん強制執行の現場に出たら、どこからそんな体力と気力が湧き上がるんか不思議に思えるほどでな。すべてを差配して独楽鼠のようにあちこちを走り回りはるんや。こればかりは見たもんしかわからんけど、そりゃア、すごかったで。

社長は、飲むと「ギハハッ」言うて笑いながら下ネタ話ばかりを連発し、よう人の鬨聲を言うてはったが、興に乗ると、好々爺然とした顔に金歯を覗かせてな、これまでの経歴をわしらに話してくれたもんやった。

そうやなア、社長役は誰がいいかなア。スーさんこと三國連太郎じゃ、ちょっとインテリっぽすぎるよなア。もうちょっと崩れた感じがいいな。そうや、もう死んでもうたけど、勝新太郎なんかぴったしや。わしも昔は、よう勝新の座頭市の物まねをしたもんやった。

「俺たちやくざな、ご法度の裏街道をいく渡世だぜ。いわば天下の嫌われ者だ。それだけに何事も渡世の筋目を通さにならねえ。だが、そんな奴がお天道様に大きな面ア向けて大手を振って歩いてやがる。それでやくざの道がたつんかい！」

どや、似てるやろ。えっ、座頭市を観たことないって？ そうか、ひろくんはそんな歳やないもんやなア。わしは座頭市の映画は観てよう研究したで。

「座頭市物語」「座頭市兇状旅」「座頭市喧嘩旅」「座頭市千両首」「座頭市あばれ旅」「座頭市血笑旅」「座頭市二段斬り」

ホンマ、どれをとってもおもしろかった。懐かしいなア。

よし、今日は久し振りに勝新の物まねで、社長のしゃべりを再現してみよか。よう聞きいや、こんな具合や。

「国体に出るぐらいに実力があるうちは、皆にチャホヤもされてよかったんやが、後輩連中に追い抜かれ出したらもうただの人になってしもてさっぱりや。このままやったら一生交番回りのおまわりで終わってまう思て転身を考えた。蛇の道は蛇でな。警察の先輩がこの世界で派ぶりようやってはるいう噂を聞いて雇ってもらうことにした。最初はきつかったで。血の出る思いで先輩について行ったもんや。先輩は結構あくどい商売してて、その上、元警察官やいう慢心があった。そんでやくざに引っかかって、ある日、行方不明になってしもた。今でも所在はわからん。失踪いうことになってるけど、多分今頃はどっかの海の底やろ。

先輩には悪いけど、それがわしに運を呼んだ。先輩の地盤をそっくり手にしたんや。そりゃア、苦勞したで。墓に持っていくしかあらへん話も仰山ある。企業の倒産関係で儲けてな。それから順風満帆やった。金が金を産んだ。よう遊んだで。北新地では夜の帝王って呼ばれた時期もある。えっ、1晩になんぼぐらい使うたことがあるかって？ そうやなア。100万円ぐらい使うた夜も何晩かあったなア。自分で儲けた金には違いあらへんけど、その金で何か事業をしたろいう気はせなんだなア。これは殺された先輩のもんやいう気持ちもあって、なんかあぶく銭のような気がしてたんやな。

ようしたもんで、そのうち商売に陰りが出てきた。坂は転げだすと早い早い。ちょっとやばいな思たらもう遅かった。そこで無理をしてヤーさんのかんでる話に乗ってそのままどぼんや。危うくわしも命をとられるとこやった。もうこんなんはこりごりや、そう思てな。ほんで地道に市の仕事をさしてもらうようにしたんや。

ほんでも、今でも有池いうたら、この業界で知らん者はおらんやろ。知らんいう奴がおったらそいつは間違いのうもぐりやで。ギハハッ」

どや、似てるか。え、ようわからんて？ そうやな、ひろくんは、さっき勝新の座頭市のこと、知らんいうてたもんなア。

まあ、それはとにかく、社長には確かにやくざな面はあったけど、頼まれたことは断れへんたちで、ホンマに面倒見のいい人やった。

元警察の同僚で、西警察の副署長を最後に退職して、自動車免許場の教官をしてはった吉田さんという人が、よせばええのにバーのホステスに入れあげてしもて借金を重ねてな。そのことが嫁さんにバレてにっちもさっちもいかへんようになったとき、「あいつはウブやからなア」いうてつぶやきながら、自分のことのように親身に事後処理に走り回ってはったし、梅田の知り合いのスナックのママから頼まれてな、借金を踏み倒してトンズラしてしもたなじみ客を探し回ったり、サラ金とヤーさんに追われてた博徒くずれを、西成のドヤ街にかくまったりしてはった。まア、この世界のちょっとしたゴッドファーザーやったんや。

滞納者に対してもそうやった。差押をしてしもたら、執行期日まで滞納者とおざなりな接触しか持たへん執行業者も多いんやが、社長は、連日のように滞納者の家を回って、自主的に出て行

くことを説得したり、出て行ったあとに住むところがない言うたら、安い借家を斡旋したり、サラ金なんか金に借りまくってる多重債務者の場合には夜逃げの手引きまでもしてはったからな。



お、もうグラスが空いてるやんか。ひろくんもかなりいける口やな。まア、もう1杯いき。お、そうか、わしにも1杯注いでくれるか。お、お、ありがとう。体に悪いんはわかってるんやけど、こればかりは止められん。ビールでいいか？ ほうか、お〜い、かあさん、もう1本ビールもってきてんか。それにわしには焼酎や。え、もうそれぐらいにしとぎって？ そんな冷たいこといいな。今日はひろくんがきてくれてんやから特別や。

さあ、話の続きをしよか。

強制執行は、朝の7時頃から午後3時過ぎにかけて、何件かを集中的に行うことが多てな。ざらやないけど、多いときには1日に10件を越えることもあった。

今でこそ執行官の収入は一定限度に抑えられてるけど、当時は上限がのうて、件数を上げれば上げるほどどんどん収入が増えたんや。それに集中的にやるほうが業者にとっても好都合やからな。

そんなためには1件1件の強制執行をできるだけ短時間で終わらせる必要がある。強制執行が始まって1時間以内には、家ん中にあるすべての物を住宅の外に運び出して、家の中をもぬけの殻にせんとあかんのや。それに有効なんはなんというても人海戦術や。社長はそんなために西成のあいりん地区から強制執行当日に必要な人足を確保する独自のシステムを作ってはった。

貫太郎さんという人足頭がいてて、その人が社長の命令を受けて人足を調達してたな。社長に言われたら、前日にその日の強制執行に必要な人足を手配して、西成の職業安定所の前で社長が手配するワゴン車を待つんや。

貫太郎さんは、栃木かどこか関東地方の富裕な商家の次男坊で、若い頃悪い遊びをおぼえて家出し、ある暴力団の準構成員になったという経歴の持ち主やった。けど女のことで組員との間で悶着を起こし、あとは流れ流れて西成に住み着いた言うてたな。

60歳をいくつか越えた年格好やったけど、本当のところは誰にもわからなかった。小さな体してたけど全身これ鋼の如しで、強制執行となったら人足にあれこれ指示を飛ばして、社長についてまるで猿のように現場を走り回るんや。右腕に龍の刺青があって、もうええ歳やけど、人足には「若」言うて親しまれてたなア。日稼ぎでまとまった金が入ったら、女と酒に使い果たすいうその日暮らしを送ってはった。

貫太郎さんは人足に対しては多弁やったけど、わしには無口やった。と言うんも社長から行政の人間とはあまりしゃべるな言うて硬うくぎを刺されてたんや。けどそれでも何かの拍子に、ちょっとしたつまらんシャレを言うてわしに笑いかけてきはることがあって、その笑顔がなんとも愛くるしかったんを今でもよう覚えてる。

そうやなア、貫太郎さんの役やったら、「武士の一分」で木村拓也の下男役をやってた笹野高史がピッタシやな。名脇役や。それにいかにもちょこまかはしこそうやないか。

貫太郎さんは、有池商事の簡単な事務補助みたいなこともしてて、わしが事務所に執行関係の書類をもって行ったりしたときに出会うことがたまにあってな。そんときの社長とのやり取りを

、社長が勝新で、貫太郎さん役が笹野高史でやってみよか。

こんな具合や。

「あ、河童さん、いらっしゃい。おい、貫太郎、河童さんにコーヒー注文してくれるか。そんで貫太郎、さっきの件やけど、明日は何人確保できたんや」

「今んところ、ヤッさんにケンにそれからボンとよしの四人ですわ。もうあと3人は今日の夕方には決めまっさ」

「ケンいうたらあの背の高いひょろっとした奴か。あいつのほかにはいてへんのか。見てたら、あいつ、作業中にうまいこと手え抜いてんで」

「社長、よう見てまんア。けど、あいつもちょっとかわいそうな奴ですねん。子どもが3人もいてまんねん。わてからもよう言うて聞かせますよって、明日はあいつも連れて行ってよろしいやろ？」

「しゃあないなア、まあ、おまえに任すわ。先週の酒屋の強制執行にきてたあのずんぐりした若いのんはどうやねん。あいつ、よう働いてたで」

「おととい、どっかに消えてしまいましたん。なんか親父に見つかってしもたから山谷にいくとか言うてたみたいですよ」

「明日の執行は大掛かりやから、大奮発したるよって、元気なんを頼むぜ、のう、貫太郎」

「わかってまんがな、社長。任しとくんははれ。で、明日の待ち合わせ場所はいつもんところでええんでっか」

「おう、安定所の近くのあっこに車を回しとく。貫太郎、ほなら悪いけど、この書類、裁判所の受付に届けといてくれるか」

「社長、いつもいうてまっしゃろ。裁判所は嫌でっせ。あんなとこわしに行け言うんは酷や。ちょうど府の人がきてはるんやから頼みはったらよろしいがな」

「アホか、おまえは。嫁さんががちょうど出かけてるから、おまえに頼んでるんやんけ。しゃあないな、ほなら、ほれ、そこの位牌、帰りに天王寺の一心寺さんに持って行ってくれ。ほら、ここが供養代や」

「昨日の仏さんのでっか。やっぱり無縁さんでしたんか」

「無縁やないが、持ち主はもうどっかに行ってわからん。骨と位牌はこればかりはほかす訳にはいかんからな。ようよう住職さんに頼むんやで」

「へえ、それやったらわしにもできますわ。ほんじゃ、早々に行ってきま。では市の偉いさんにはごきげんよう」

「ごちゃごちゃいわんとはよいけ！」



どや、今度は似てるか？ 何、笑てるねん。そんなおかしかったか？ 笹野高史は、今、練習中やから、まだ十分のものにはできてへんけど、個性が強いからなァ。特徴つかんだらこっちのもんなんや。

話が、社長と貫太郎さんのことに移ってしもたけど、さあ、強制執行のことや。

強制執行は、朝7時過ぎに、最初の執行現場の滞納者の家のドアを叩くことから始まる。滞納者が住んでたらその滞納者に執行官が執行宣言をして、誰も住んでへんかったら鍵をこじ開けて家ん中に入り、家財道具一切を外に運び出すんや。

強制執行はこちらの思惑どおりにはなかなか進まん。滞納者が既にどこかに消えてたり、住んでも社長の事前の説得に納得してればスムーズに事が運ぶけど、執行当日になってもまだその家に住み続けて抵抗する滞納者も少なくないんや。

生活に困って家賃を支払おうにも支払うことができん場合から、資力はあるのに意図的に支払いをサボる場合まで、家賃を滞納する理由もさまざまや。

多かったんは、団地の主婦が団地内の主婦同士への見得から、収入不相応の家具を取り揃えたり、派手な生活に走って生活費をそっちにつぎ込んでしもて家賃を滞納するというケースやな。

まだ3ヶ月の滞納やもん、ちょっと切り詰めたらなんとかなるわ。 10ヶ月になってしもた。けど計画的に返せば大丈夫よ。 え！ もう20ヶ月で50万円！ どないしょ。こんなこと旦那には絶対言われへん。 いやァ、いつの間にか80万円！ けど市営住宅やもん。行政の人が強制的に出て行けなんて無体なことする訳ないやん。旦那に相談せえってうるそう言うてはったけど、そんなことできる訳ないし。それに市営住宅が強制執行されたなんて話、今まで聞いたことない。きっとどうにかなるわよ。

まあ、こんな調子やな。

強制執行の現場を思い起こしながら、嫁さんが滞納の事実をひたすらだんなに隠してて、だんなが執行当日までそのことを知らなんだときの様子を再現してみよか。

そうやなァ、社長が勝新で、亭主役がわしの得意な橋爪功でいこか。市の担当者であるわし自身は火野正平や。え、火野正平みたいに女泣かせやったんかって？ いや、これはわしのあこがれ、あこがれ。

ナレーションは若山弦蔵。え、若山弦蔵って誰やて？ そうか、ひろくんは若山弦蔵を知らんか。やっぱ若いなァ。007のショーンコネリー役の声優いうたらわかるやろ。そうそう、あの低音の魅力や。

007の始まりの音楽はこうや。チャンチャカチャチャチャチャン チャンチャカチャチャチャチャン チャチャーチャチャチャン、バキューン。「悪いやつらはやつけた。お楽しみはこれから、これから」てな具合や。

さあ、キャストはそろた。開演、開演。

早朝7時過ぎ。夫と妻、それに幼い子ども2人が食卓を囲んでいる。執行官を連れ人足を従えた社長が住宅のドアを叩く。

ドンドン。

「開けて下さい、裁判所です」

ドンドン。

「開けて下さい。山田さん、おられるんでしょう。裁判所です。開けてください」

亭主がドアを開いて顔を出す。

「どなたさんでっか？ 裁判所とか何とか聞こえたようやけど、何かあったんでっか？」

すかさず社長が開かれたドアの間に足を入れる。

「ご主人、裁判所や。中に入らしてもらうよ」

訳がわからずドアを閉めようとする亭主。その体をぐっと押し返して中に入り、社長が大音声。

「こちらは裁判所の執行官や。今から強制執行をさせてもらう。さあ、先生、執行宣言しとくなはれ」

それを聞いて慌てふためいた亭主が怒り出す。

「一体これは何ごとやねん、こんな無体なことして。ワシらが何した言うねん」

妻を振り向き亭主が言う。

「おい、まさえ、おまえ何か知ってるんか？」

妻は俯いたまま。その妻に向かって社長が言う。

「奥さん、ご主人にまだ何も言うてへんのかいな。あれほど早う相談せえ言うたのに」

社長がその言葉を亭主に続ける。

「あんた、ホンマに何も知らなんだんかいな。この家の家賃はもう3年もたまってんねん。金額にしたら100万円を超えてるんや。奥さんには何度も浪速市から家賃払うよう督促がいつてるはずやけど、この始末や。1ヶ月前に家財道具を差し押えしてからも何度も連絡させてもろて、なんとかせんと大変なことになる、早うだんなに相談しいやて言うて説得したんやけどなァ。今日の強制執行のことも奥さんには念押ししてたんやけど、あんた、ホンマに何も奥さんから聞いてへんのかいな」

これを聞いた亭主が激昂して妻をなじる。

「まさえ、一体、これはどういうこっちゃ！ 毎月、ちゃんと生活費は渡してるやろ。こんな大事なこと、今までなんで隠してたんや！ 何や、下向いて。何か言わんとわからんやないか！」

亭主が怒声を上げて、うなだれるばかりの妻に詰めよると、食卓にいた幼い子ども達2人がシクシク泣き始める。社長に亭主が哀願する。

「なあ、もうちょっと待ってくれ。今日中に金はなんとかする。お願いしますわ、ホンマ。ここを追い出されたら、わしらはいくとこがないんや。ホンマ、頼んますわ」

「あのなァ、ここまできたら、ホンマにどうしようもないねん。もう諦め。これから住む家のことは後で相談に乗ったるさかい」

「そんな無体な。それはないやろ。ここは市営住宅や。市の責任者はきてへんのかいな」

社長が同道していた市の担当者に目配せする。それを見て亭主が担当者に縋りつく。

「あんたが担当者か！ 浪速市はこんなむごいことを平気で市民にするんか！ あんたは誰のお陰で生活できてる思てんねん、ワシらの税金とちゃうんか！ あんたが止め言うてくれたらこの強制執行は止められるんちゃうんか。なあ頼むわ。必ず近日中に金を用意するよって、追い出すのだけは堪忍してくれ。なあ、頼むわ」

困った顔で担当者は言う。

「山田さん、ここまできたら本当にどうしようもありません。ここは出て行ってもらうしかないんです。奥さんには私らからもこんなことにならんように何度も何度もお願いしてきたんですよ。裁判所に訴えようが市長に訴えようが、もうどうしようもないんですわ。あとのことは社長が相談に乗ってくれるはずですから、もうここは諦めてもらうしかありません」

それを聞いて肩を落とすうなだれる亭主。ダンボールを組み立てて、人夫がその中に家財道具を詰めていく。

まさに修羅場やで。けどここまできたらもう誰にもこの強制執行は止められへん。うなだれたままの嫁さんの横で、だんなの怒声が涙声に変わり、その涙声が哀願に変わるその間にも、人足が手早うダンボールを組み立てて、その中に競売で換価できる価値のあるものと、それ以外のものを仕分けながら詰めていくんや。

滞納者もその気持ちを持って行く場がないからな。やるせない憤懣は、よう行政担当者であるわしに向けられてきたもんや。

だんなに力まかせのビンタを喰らった嫁さんが、目を真っ赤にして「きっとあんたの夢枕にたつてやる！」そううて、両手でわしの胸をきつう絞り、泣き崩れたことがあったなァ。

「1歩でもそこから中に入ってみい。刺し殺したる！」そう叫んで包丁を振り回す亭主をなだめようとして切りつけられたこともあったで。

人の気配がせえへんもんやから、鍵をこじ開けて玄関に入ってみたら何か臭い。靴を脱いで部屋に入って障子を開けたら、伸びきった電器コードを首に巻きつけて、畳の上に張り付いていた死体を発見したこともある。

強制執行してたら小学校から子どもが帰ってきたこともあった。親は金策か何かに走ってたんやろ、どこにいったかわからへん。強制執行が終わって「お子さんは小学校に連れて行きます」そう両親への張り紙を扉に貼って、担任の先生に事情を説明し、とりあえず子どもを預かってもらったこともあったなァ。

ある日の執行現場での、わしにとってはいかにも情けない思い出話をしようやないか。

1日に6件近くの強制執行が2日続けて行われた時のことや。

初めの日、「滞納者の反応がちょっと鈍いよって、今日の執行は難渋するかもしれんな」そう言うた社長の予想通り、6件のうち2件が執行に抵抗した。

1件は乳飲み子を抱えた母子家庭で、もう1件は独居老人やった。予想されてたこともあって、社長は強制執行後の仮の家を確保した上で執行に臨んだんやったが、母親は乳飲み子を抱えて居間をてこでも動こうとせんと、終始無言のままでその目に涙をためて、わしをみらみ続けたんや。

わしが悪い訳やない。わしのせいやない。仮の住まいも確保してる、そう自分に言い聞かせてても、その視線はわしにはこたえた。

「あんたらの世話にはなりたくない。親戚を頼る」そう言うて小荷物をまとめて寒空に出て行ったおじいちゃんの後ろ姿は見るに忍びないもんがあった。つくづく因果な仕事やなァとため息をついてそのおじいちゃんを見送ったもんや。

翌日も3件の強制執行があることはわかってたけど、その日の夜、わしは吞まずにはおられんかった。そんで泥酔いになるまで酒を飲んだ。

翌朝、どうして帰ったものか、アパートで目を覚まして時計を見たら、なんと7時やないか。しもた！ 強制執行に遅れる！ そう思ったがもう遅い。

「この仕事は時間との勝負や。時間だけは守らなあかん。時間にルーズな奴は信用でけん」社長はいつも人にそう言い、わしら担当者も執行官がやってくる予定時間の30分前には執行現場に必ず到着することにしてたから、わしは慌てふためいた。

とにかく急いで行かなあかん。取るもんもとりあえず大通りに出てタクシーを拾い、現場に急行したんやったが、着くともう既に1件目の強制執行は終わってて、人足が後片付けをしてる。聞くと社長と執行官は既に次の現場に向かった言うやないか。

急ぎタクシーを走らして次の現場に行ってみたら、その住宅の主婦と社長が揉めてて、主婦がさかんに「明日まででいいから待ってください。お金は必ず今日中に用意しますよって」言うて社長に食い下がってた。

いつもなら決してこんなことは言わんのやが、社長も頭にきてたんやろ。わしを見てな、主婦にこう言うたんや。

「やっと市の担当者のご到着や。あんた、この人に頼んでみたらどうや」

そしたら、すかさず主婦がわしに詰め寄ってきてこう言うやないか。

「あんたが責任者ですか。もう2度と滞納はせえへんよって、どうか今回だけは堪忍して。今、主人が金策に走ってるよって今日中にはなんとかします。このとおり、このとおりお願いしますわ」

わしはいつものように「奥さん、ここまできたらそれはもう無理です。私の力ではどうにもなりませんねん。もう手遅れなんですわ」そう答えた。

けど、主婦はそれに聞く耳をもたず「そこをなんとかお願いします。あんたにならできるんでしょう。ここを追い出されたら私たち家族はどこへ行ったらいいんですか」そう言うて声を絞り上げて哀願してな、その声はだんだん嗚咽に変わっていったんや。

そんなとき、わしの頭ん中に渦巻いていた思いはどう表現したらいいやろなァ。

乳飲み子を抱えながら、終始無言でわしに向けられた前の日の母親の目。あんたらの世話にだけはなりとうない、そう言うて家を出て行った独居老人の後姿。強制執行では、絶対してはあかんと言われ続けてきた遅刻をしてもうたことに対する申し訳なさ。こみ上げる2日酔いの嘔吐感と頭の痛み。目の前で繰り広げられる主婦の哀願。そんなこんなが頭ん中に入り乱れてな。

「奥さん、もうここまできたらだめなんです。警察に訴えようが、市議員に頼もうが、市長に直訴しようがもうだめなものだめなんですよ」

わしは、確かにそのときそう言おうとしたんやったが、それが言葉にならんや。ここで泣いちゃあかん、絶対あかん、そう思て涙腺に力を入れようとしても、涙がぽろぽろぽろぽろ流れ落ちてきてなァ。とうとうわしは、わしの上着を握ってた主婦のその両手を握り返して、その主婦を引きずるようにその場に泣き崩れたんやった。

ああ、なんたる醜態！ 今思い出してもホンマに恥ずかしい。

驚いたのは何あろう相手の主婦のほうや。社長や執行官は何事が起こったんやろ思て、やや遠巻きにわしの様子を窺うばかりやったが、逆にわしに泣き崩れられてしもた当の主婦は、この状況をどう理解していいかわからんと、ただただ呆然とわしを見下ろすばかりやった。

この執行現場での主客転倒劇は、結果的に主婦の諦めを誘うてな。穏便なうちに執行を終わらせることができたんやったが、わしはそれからしばらくの間、社長やみんなに「泣きの河童」言うて、ようからかわれたもんや。

この話は今でこそ笑い話にできるけど、あの頃は社長や仲間たちにそうからかわれるたびに、恥ずかしさにわしは身悶えしたもんやった。

ひろくん、えらい深刻な顔になってきたなあ。ちょっと話がきつかったか。まあ、もう1杯いき。え、そろそろ焼酎にするって？ ほうか、焼酎は水割り、それとも湯割り？ わしと一緒にロックかいな。ほう、交通事故で死んだおまえのおやじさんも酒が強かったて聞いているけど、その血を引いたんやなァ。

お〜い、かあさん、グラスと氷と焼酎瓶持ってきてえな。いやいや、わしが飲むんやない。ひろくんが飲む言うてるんや。まあ、わしも飲むけどな。

わしの話聞いても、ひろくんは何も心配せんでもええで。というんも、この話は滞納整理班ができて3年目から5年目にかけての話やからな。

わしは滞納整理班に5年いたんやが、班がでけたときに在籍してたわしらが他の部署に転勤してしばらくして、市の職員が強制執行について行く必要はないんちゃうか、そんなんは執行業者に任せといたらどないや、それに市の職員をそんな目にあわすんはようないんちゃうか言う議論があって、結局、強制執行は執行官と業者に任せる言うことになったはずやねん。そやから、今

はもう、市の職員が執行業者と一緒に、現場に行く言うことはもうのうなってるからな。

それに、これまで話してきたみたいな厳しい現場は、執行のたびに常にある訳やなかった。だいたい差押から強制執行までの間に、社長が滞納者と話をつけて自主的に退去させたり夜逃げを手伝うたりして、当日の執行がスムーズにいくよう、事前に周到に準備をしてたんや。

それでも、最後の最後まで滞納の事実を知らされなんだり、そうとわかってて執行そのものに抵抗する滞納者も、10件のうちに1、2件は必ずいたから、そんな執行が予想される日の前日は、不安が先に立ってなかなか寝つけへんかったなア。

けど、人はわしの話を知ると、それはまたえらい部署やなア、大変やったやろ、そう言うてわしを慰めてくれるけど、強制執行の仕事は言うほどにわしにとって苦痛を伴うものやなかった。

わしら勤め人は、例外はあるけどその多くは組織の中の歯車の1つや。その歯車もベルトコンベアーの流れ作業に従事する場合から、自由な裁量で目的達成に向かうことの許される場合まで様々や。

強制執行の仕事は、窓口業務やチームの歯車としての拘束性はかなり低うてな、滞納者のリスト作りに始まって、催告書の送付、訴訟の提起それに続く強制執行と、最初から最後までその全ての過程を自分でコントロールすることができた。自分の担当地域については誰の指示も受けんとかなり自由にすべてを決めることができたんや。

そやからこれまで話してきたような執行現場での滞納者とのやりとりに出会うたときにはこちら辛い思いをしたもんやが、仕事全体としてみたら、目的達成に向けて広範な自由裁量を与えられてて、そのことがこんな仕事は嫌やなアいう思いを和らげてくれてたように思うな。

けど、強制執行いう悲惨な末路を目の前にして、それはあんたの自業自得や、わしには何の関係もあらへん言うて開き直って平然とするほどに、わしの神経は凶太うはない。これは仕事なんやと自分に言い聞かせながらも、その日、目にした悲惨な光景が脳裏にこびりついて、滞納者の怒声、呻き、嗚咽、憎悪、怨嗟、嫌悪、そういった裸になって現れる人の生の負の感情に飲み込まれるということがようあった。

そんな厳しい強制執行があった日は、社長と一緒に執行現場の近くの焼肉屋で、焼肉を食いながら酒を煽るんが常のことやったなア。とにかく強制執行が終わると焼肉やった。それはいわば条件反射のようなもんやったな。焼肉である必要はどこにもなかったんやが、憑かれたようにわしらは焼肉を食い、酒を煽ったもんや。

公営住宅課の前は法文課にいてたひろくんには釈迦に説法やろけど、コンプライアンスという言葉を知ってるやろ。そうや、法令遵守義務や。今はコンプライアンスの時代やから、公務員が業者と飲食をともにするなんてことは、それがたとえ職務に関係してへんでも好ましいことやない。けど、あの頃はまだ、市の裏金問題も表面化してへん時代で、公務員の倫理意識、コンプライアンス意識はそう高うなかった。裏金をうまいこと作るんが優秀な総務係長やと思われてた時代やったからな。そやからわしも、業者と飲んでも便宜を図らなんだら問題あらへんてそう思ってた。

まあ、そんなこんなで、わしは社長と飲食を共にするということにさして罪悪感を感じてへんかったんや。そればかりか誰かと飲まずにはいられへんいう思いでこっちから社長を誘うことさえ何回かあった。

社長と焼肉屋でいい加減、食べて飲んだら、社長から貫太郎さんに人足賃が手渡されて、それから社長に誘われて、京橋の Snackbar「チロル」に流れることが多かったなァ。

チロルは、京橋近くの国道1号線のガード下から商店街に入って数分歩いたビルの中にある Snackbar でな。カウンターに7、8席が鉤型に並んで、若いときには京都の「都をどり」の舞台を踏んだことが自慢のなおみママが経営する小さな店やった。

え、なんやて。ほうか、興に乗って話してたらもうそんな時間か。ホンマや、外はもう暗いやんか。ひろくんは、また、近々、今度は咲子と一緒にうちにくることになってるんやろ？ そうか、ほなら続きは今度きたときにして、今日んところはこれぐらいにしとこか。けど、乾き物ばかり食うてたら、なんか腹が減ってきた思えへんか？

実は、昨日、かあさんと一緒に京都の錦市場に行ってきたな。ひろくんも知ってるやろ、錦市場。阪急の京都河原町駅から歩いて10分ぐらいかな。狭い露地みたいな通りで雑然としてるけど、あっこ行くと京都にしかない漬物やら何やらがいろいろあってな。ときに行きとうなってかあさんと一緒に行くんや。

ほんで、昨日は錦市場で鰹節を買うてきた。袋に入ってるやつやないで。1本3000円するホンマもんの鰹節や。これを削り器で削ってダシを取ったら、これがまたうまいんや。ひろくんは知らんやろけど、わしはこれでも料理を作らしたらちょっとしたもんやねんで。

これからそのダシで作ったそばを食べさしたるわ。自慢やないがこれは旨いで。びっくりして腰抜かしなや。焼酎でも飲んでちょっと待とき。ダシは今朝作ってるから、あとはネギとかまぼこ切って、ダシを温めたらすぐできるからな。

咲子が入院したて聞いたときには、ホンマ、びっくりしたけど、無事手術が終わってよかったなァ。だいたい、60路を超えてまで盲腸を抱いてたら、盲腸の方もへばってしもて暴れる元気がなくて聞いたことあるけど、咲子の年になっても盲腸を患うなんてことがあるんやなァ。

まあ、しかし盲腸でよかった。咲子もよう肥えてるよって、脳溢血とか脳梗塞で倒れた言うたら、それこそことやからな。ええ機会や。しばらく入院して節制したらええ。咲子も少しは痩せるで。

まあ、冗談はさておき、咲子が集中治療室からこの部屋に帰ってくるまで、結構、時間はあるやろから、この前の話の続きでもしよか。

この前はどこまでやったかな。そうや、思い出した。強制執行が終わったら、社長と焼肉食うて、そのあと、よう京橋のスナック「チロル」に流れたいうところまで話したんやったな。よし、そのチロルのことから話そか。

チロルにはわしにとって大事な思い出があるんや。それはわしがある芸能人とチロルで会うたときのことやけど、これからそれを再現してみるから、ひろくんはその芸能人が誰か当ててみ。

あれは、仕事を終えて先輩と2人で京橋の居酒屋で1杯酒を引っかけた後、チロルに流れたときのことや。

客はわしら2人だけで、しばらくママとあれこれ世間話をした後、カラオケになった。そんで2人して何曲か歌うてボルテージが上がり始めた頃、客が2人入ってきてな。若い男を手前にして、1番奥の席にひよろとしたかぼそそうな男が座った。

誰かに似てんなとは思たんやが、店ん中は暗いし、2人とも結構出来上がったから、あんまり気にせんとカラオケを歌うてたら、しばらく黙って飲んでたカウンター奥の男が、わしに向こうてこう言うた。

「おい、あんた、そんな歌いかたじゃだめや。その歌はこう歌うんや。よう聞いとき」
そんで自分でワンフレーズを歌うて、横柄な口ぶりでこう言うやないか。

「あんた、もう1回、今んとこ歌うてみ、教えたるから。このわしが誰か知ってるやろ」
手前に座ってた、どうもマネージャーらしい男は、困惑した顔して押し黙っててな。ママが「お客様さんに迷惑かかるからそれぐらいで」とそいつを止めようとしたんやが、わしも酔いが回ってたから「ほなら歌わしてもらいます。教えてください」言うて続けて歌を歌うたんや。

けど数フレーズを歌うたあたりで、そいつはわしに向こうて「だめや、そんなんじゃ。下手くそ、やめてまえ！」言うて罵声を浴びせてきた。何、いくさるねん思たけど、わしはその声を無視して歌うてると「うるさい、アホ、耳が腐る！」と、また罵声や。

これにはわしも頭にきて、そいつが誰かはわかったけど「偉そうに、あんた、何様のつもりや！人に歌い方教えたる言うというてその言い方はないやろ」そう言い返したら、そいつはこう言うた。

「オレは演歌歌手の雪節子を教えてるんやで。おまえみたいな下手に教えられるか！ おまえみたいな奴はここから出て行け！」

おっ！ ひろくん、やっとわかってくれたか、そうや、そのとおり、そいつは「やすきよコンビ」で一世を風靡したあの横山やすしことやっさんやったんや。

なんぼなんでも、耳が腐るとか出て行けはない。わしもどたまにきたから、こう言うたつた。

「何言うてんねん。こっちが先客やで。あんたの方こそ出てけ！」

そしたら、やっさんが「素人が、何を偉そうなことぬかす。わしが誰か知ってて言うてるんやろな」とこうや。

そんな口論にママが「河童ちゃん、今日はもうそれぐらいにして」言うて意味ありげな視線を投げかけてな。わしは仕方なう「ホンマに気分の悪いおっさんやな。ああ、胸わる。ママ帰るわ」そうセリフを捨てて先輩と店を出たんや。

2、3日してチロルに行ったとき、ママに聞いたら、あの頃やっさんは、北新地の行く先々でトラブルを起こしてどの店でも出入り禁止をくらって、京橋に流れてきたんやが、京橋でもおんなじことを繰り返して、今や歓楽街の鼻つまみ者になってるって聞かされた。

あの日、やっさんは、びっくりするほど青白っぽい顔をしてて、体全体が病魔に蝕まれてるんが誰の目にも明らかやった。きっとあれは、破天荒な人生を生きてきた天才が、もう誰にも相手にされへんようになってしもて、世間に最後のだだをこねてたんやろなア。

やっさんが死んだんはそれから1、2年後のことやった。

こんな貴重な酒の肴は滅多に手に入るものやない。いっそあんとき、やっさんとつかみ合いにでもなれば、もっとおもろい思い出になったかもしれへん、惜しいことしたなア、そう思うことがようある。

話を元に戻すけど、焼肉食うて酒飲んだ後、社長とわしがチロルに着くと、社長は事務所で留守を守ってる奥さん、皆が奥さんと呼んでたけど、実は愛人やけどな、その奥さんに電話でチロルに来てるいうて所在を告げて、そのあと、続けて滞納整理班の山本さんと岡さんに電話するんや。

わしはこの前言うたように、滞納整理班ができてから2年後にここに配属されたんやったが、二人は班ができた当初からのメンバーでな。強制執行を軌道に乗せるために苦労を分かち合ってきた仲間同士やった。山本さんが東部地区、岡さんが西部地区を担当してたな。

わしはこの2人の先輩と気が合うて、仕事が終わったら、市役所近くの、皆が天満村言うて呼んでた安酒場で、3人で焼酎5合瓶1本を飲みきったらその日はお開きにするというような生活を送ってた。

そやから、強制執行の日は、その飲み場所が天満村から京橋に変わったいうこっちな。既に出上がってる社長とわしが、ママを相手におだを上げたりカラオケを歌うたりしてたら、そこに山本さんと岡さんが加わるんや。

山本さんは、中肉中背の胴体の上に小さく長細い頭をちょこんと乗せてて、なんのとうこけしを連想させるような人やった。35歳やったけど、もう既に頭が禿げ上がってたから、年よりは10歳は老けて見えたな。胃腸を悪くしてて、そのせいで胃臭がひどうてな。なるべく顔を近づけんようにしたいんやが、小さな声でボソボソ話しはるもんやから、それでは話がよう聞き取れんいうジレンマに皆が悩んでた。腺病質なたちで、若いときにはしばらく躁鬱症で職場を休んだこともあるようやった。

世間を斜めから見る癖があって、そうして作り上げてきた自分の人生観、世界観を尺度に人を鼻で笑うようなところがあったな。それがときに人の反感を買うんや。反面、人情家で、ちょっとした美談や人情話にすぐ涙する。ひろくんの知り合いにも、こんな奴いてるんちゃうか？ 相反しながら自分の中に同居してる世間への反発と順応をちょっと持て余してるいう感じやったな。

岡さんも山本さんと同じ歳で、ずんぐりむっくりした体つきでな、山本さんとは対象的に磊落な物言いをする人やった。若い頃は、男前でならしてたらしいんやが、スナックに勤めてたホステスに惚れこんで同棲し、その女に捨てられた記憶がトラウマになっててな。女に対する猜疑心はもはや偏見に近かったな。グチリの岡言われるぐらい何に対してもグチグチグチグチ、グチって、気持ちが高ぶってきたら、話の語尾に、ホンマ、しょうもない言うフレーズをつけて話しはるんや。

そうやなあ、山本さんと岡さんは、伊丹十三監督のマルサシリーズでいこか。若ハゲ言うたらいわずと知れた大地康雄やな。マルサの女での大地康雄は、ホンマ、よかった。わしもよう物まねした。けど、皆んなあんまりこの役者のことは知らへんから、こっちが熱演してもあんまり受けへんねん。いい役者やのにな。

岡さんは、なんというても村田雄浩が抜群やな。マルサでもいい役どころを演じてたやないか。ひろくんもビデオかなんかで見たことあるやろ？ あいつの演技は天才的いう話を聞いたことが

ある。いろんな番組に出てて、あんなに力があんのにまだ主役を張ったことがない。脇役に徹してるんやな。これからどんな役柄を演じるんか楽しみな役者やで。

まずグチリの岡さんから物まねしてみよか。こうや。

「なんや昨日の執行は！ ホンマにどたまにくる。おい、河童、聞いてんのか、こら！ 課長もたいがいやけど、昨日のうちの班長の発言、あれは何や。しゃべるんやったら、もうちょっとはきはき喋らんかい。ホンマにしょうもない。ほんで、うちのアルバイト、ありや何や。一体誰が雇うたんや。46時中、隣の梅ちゃんとべちゃべちゃべちゃべちゃ、くっちゃべって。うるさい言うたらない。これやから女はダメなんや。ホンマにしょうもない」

「岡さん、もうええがな。岡さんの気持ちはみんなようわかってる。それぐらいにして、さあ、もう1杯ぐっといこ」

「河童はそう言うけどな。悔しいやないか。わしらがこんなに苦労してんのに、隣の係はあれは何や。鐘がなった途端にすぐ帰ってしもて。カラスが鳴くから帰りましようは歌だけにせえ。特に女子職員は鐘が鳴る前から更衣室で着替えて準備万端、鳴った途端にはいサヨナラや。ホンマ、どたまにくるな。ホンマにしょうもない」

まあ、こんな具合や。

大地康雄の山本さんとわしの会話を再現したらこんな具合やな。

「おい、河童、今日の執行はどうやった。いまくいったんか？」

「そりゃア、大変でしたよ。旦那が部屋の中で刃物振り回すもんやから危のうて。警察を呼んでも納得せえへんで、近くに住んでた嫁さんの親父が説得してくれたんですわ」

「やっぱり、嫁さんが旦那に滞納のこと黙ってたんか？」

「いや、そうやないんです。かわいそうなんは嫁さんのほうです。旦那は稼いだ金のほとんどをパチンコや競馬につき込んで、嫁さんには生活費もほとんど渡してなかったみたいでしたわ。ありゃア、あのおっさんの最後の悪あがきやね。あんまり同情する気になりません」

「今日の7件の執行の中に母子家庭があったやんか。あれは大丈夫やったんか？」

「目に1杯涙溜めて、これから兄ちゃんのところに少しの間厄介になります言うて、子どもと一緒に出て行きましたわ。確か、兄貴も岡さんの担当してる西部地区の山岡住宅に住んでたんちゃいまっか？ あの狭いところに転がりこまれたら、兄貴もその奥さんも大変やし、本人も肩身が狭いやろなア。それ考えるとやりきれませんわ」

「おまえが悪い訳やないんやからしゃアないやんか。けさ、市議員から課長んところへ電話が入って、班長と一緒に議会事務局へ説明に行った。あとでその話の中身を聞いてみたら、今日の母子家庭の執行、どうにかならんのかいう相談やったらしいわ。課長も班長も、執行までにどんだけわしらが滞納者にこのままやったらどうにもなりませんよ言うて説得してきたか、社長が差押から執行の日まで日参したかを説明して納得してもろた言うてた」

「そりゃそうやけど……」

「そんなシケた面せんと、景気ようにいこぜ。パッとやろ、パッと。わしはまだシラフやで。おい、にいちゃん、ビール持ってきて」

てな具合や。

強制執行が終わってチロルに寄った日のことから話が飛んでしもたけど、結局、いつもおんなじこっちゃ。社長と山本さんや岡さんかわしの誰かが飲んでるところに残りの者が加わって、あとはいつものように飲めや歌えのどんちゃん騒ぎになるんやった。そこに、8時頃、事務を終えた奥さんが加わるんや。

奥さんは、その昔、北新地のクラブに勤めてた頃、有池社長に見初められて愛人になりはった人で、ホステスをしてた頃は人も羨む細身のベッピンさんやったそうやが、わしが出会うた頃には、往年の面影を偲ぶよすがのものうてな。えらい肥え太って、その体を引きずるようにしてゆっくり歩いてはったなア。

これには訳があったんや。奥さんは、余程、社長のことが好きやったんやな。本妻さんをも巻き込んだ騒動を起こしはって、果ては自殺を図りはったんや。幸いなことに一命はとりとめたものの、その後遺症でやや脳の動きが鈍うなってしもて、なんか自分自身を自律する機能が鈍化してしもたんやな。そんでそれが過食につながった言う話やった。

奥さんが自殺を図りはったとき、社長と本妻さん、奥さんの間にどんな葛藤があったんかは想像をめぐらすしかないけど、社長が本妻さんと別居して奥さんと暮らすことを選んだんは、奥さんへの同情からだけやなかったやろと思う。

ときに、社長と奥さんは、わしらの前で遠慮もせんと痴話げんかして、そのあと、仲直りしはるんやったが、そういうとき、2人の中には、あんたを、おまえをこそ命とするという情念のようなものが流れるんをよう感じたもんやった。

奥さんは社長の秘書役を務めてはって、社長と京橋のマンションに夫婦同然に住んで、いつも社長に影のように付き添ってはった。およそ自殺なんていう暗い過去を背負ってることはみじんも感じさせへん明るい気性でな。わしらのことを自分の子どものようにかわいがってくれて、わしらも、奥さん、奥さん言うて呼び親しんでたんや。

わしが、滞納整理班に配属されて間もない頃、事務所に書類を持って行ったとき、奥さんと交わした会話はなんか印象深うて忘れられへん。

そうやなア。女優でいうたら樹木希林なんか奥さんの役どころやろけど、わしには無理や。女の人の物まねはやっぱり難しい。わしにちょっとだけ雰囲気を出せるんは市原悦子やな。あの、なんかぬちゃっとした雰囲気は独特のもんがあるからな。市原悦子であんときのわしと奥さんの会話を再現してみよか。もちろん、わしは火野正平やで。

「えらい今日は静かでんなア。社長は裁判所かどこかでっか。奥さん1人で事務所を守ってたらねずみに引かれまっせ」

「そんなねずみがいてたら引いてほしいもんやわ。あの人はずうどさっき貫太郎さんと一緒に、来週月曜に強制執行することになってる、山本さん担当の東部地区の山都住宅にいったとこですねん。滞納してる人、サラ金からも仰山お金借りてはって、家賃どころやない言うから、あの人を手引きをして、今夜、夜逃げをすることになって。その打ち合わせですわ」

「へえ、社長は夜逃げの手助けもしてますのんか？」

「そうです。夜逃げの手助けもあの人の大事な仕事やから。河童さんはまだよう知らんやろけど、借金まみれになったら、もう自分ではどうにも身動きがでけへんからね。どこに逃げてもサラ金が追っかけてくるし。サラ金に居所を知られずに新しい生活しよ思たらちょっとしたノウハウが必要ですわね。あの人がそれを段取りしてる訳。だから来週月曜は山都住宅は空やから、山本さんの強制執行は楽やと思うわよ」

「へえ、そうですのんか。確か誰かの小説にもそんな話があったなア。社長は元警官やから、サラ金なんかの裏情報にもたけてはるんやね。ところで、奥さんは社長が警察官のときに社長と結婚しはったんでっか？」

「河童さん。私、あの人の奥さんとは違うわね。世間でいう愛人。随分ふけてひねた愛人やけど」

「えっ、そうなんでっか。そりゃあ、知らんこととはいえ、つまらんこと聞いてしもてすんません」

「いいんよ。みんな知ってることやから。私、これでも昔は華奢でね。新地のクラブでホステスしてて、自分で言うのもなんやけど、その頃はモテモテやってん。ナンバーワンとったことも何回かある。けど悪い男に引っかかってしもた」

「悪い男って社長のことでっか？」

「そうそう、あの人のこと。もうあれから何年経つやろ。殺したるか思したこと、何回あったか知れへんけど、もうそれも昔話になってしもた。あの人には命助けられたしねえ。河童さんは独身やけど、いい人見つけたら大事にせなあかんよ。女を泣かせるような男になったらあかん。私なんか、せんどあの人に泣かされて。そんでもあの人は別れられへんわね。どうしてやろね。憎らしい。ホンマにどうしようものう好きやねん」

やっぱり市原悦子はちょっと無理があったか？

けどこんな言い方で、奥さんが社長とのことをわしに話してくれたんは、後にも先にもあんときだけやった。まだ知り合っ間もない時期やったが、あのとき、話してるうちに奥さんの気持ちの中にわしを受容する思いが生まれて、それが奥さんの気持ちの脱力を誘ったんやないか、そんなことを思うことがある。

こうして総勢5人が集まったら、わしらは社長がへべれけになって正体をなくするまでとことん飲んだもんや。そして下ネタばかりをがなっていた社長に沈黙がやってきたらタクシーを呼んで、皆して社長を抱き抱えるようにして車に乗せ、奥さんともどもマンションに送ったもんやった。そんでまたそのあと、3人で飲み直してな、そんでようやっと早朝からのわしの長い長い1日が終わったんや。

おっ、外がちょっと騒がしいな。咲子が帰ってきたんちゃうか。

あ、これはどうも、すんません。そうでっか、まだ寝てまんのか。麻酔はもう切れてますんやろ。そうでっか。腹膜炎を併発しかけてる言われたときには心配しましたが、どうもホンマにありがとうございました。咲子に代わってお礼申し上げます。入院期間はどれぐらいですわねん？

1週間ほど。あ、そうでっか、わかりました。

盲腸の手術ぐらいやったら、その翌日には退院できるて聞いたことあるけど、腹膜炎を併発しかけてたんやったら1週間ぐらいはしようないわな。咲子が目え覚ましてたら声かけて帰ろ思ってたけど、寝てるんやったらしゃあない。まあ、せんぜいゆっくり養生せえて兄貴がいうてたて伝えといて。

けど、これで一安心やな。ひろくんは咲子が目え覚ますまでここにいてるんやろ？ えっ、泊まるって！ 盲腸やで、そこまですることないで。ま、親1人子1人やから好きにしたらええ。わしはもうこれぐらいで退散するわ。咲子が目え覚ましたらよろしゅう言うといて。ほんならな

。

ひろくんもここんところ頻繁にうちにきてくれて、わし嬉しいわ。なかなかわしの昔話に機嫌よう付き合うてくれる人はいてへんからな。うちのかあさんなんか、わしが話しかけようもんなら、あ、ガスに火いつけてたとか、洗濯もん取り入れるの忘れてたとか、果ては、あっ、ちょっとおしっこしたなとか何やかんや言うて、すぐどっかに行ってしまうねん。

ところで、今日は何の用できたんや？ あ、そうか。咲子の入院中にかあさんが病院に持って行った洗面道具を返しにきてくれたんか。わざわざ、そんなことせんでもええのに。えらいご丁寧なこっちゃな。まあ、折角きてくれたんや。この前は咲子が病室に帰ってきて話が途中で終わっしてもたから、今日はその続きをしょうか。えっ、わしの話を楽しみにしてくれてるって？ ホンマかいな。おじょうずでも、わし嬉しいわ。

病室ではどこまで話したんやったかな。そうや、確か山本さんと岡さん、そんで社長の奥さんの話をしたんやったな。

お〜い、かあさん。ひろくんにビールを持ってきたって。それから、今日の昼、わしの作った筑前煮があったやろ。あれも持ってきてえな。コップは1つやないで2つやで。

社長、奥さん、貫太郎さん、山本さんに岡さん、それぞれに思い出深いけど、あの頃出おうた人で忘れられへん人がほかにも何人かいてる。

今日はそのうちの一人、個人タクシーの運転手をしてた小山さんのことを話そか。

強制執行の朝は早いからな。現場に行くには電車の始発前にアパートを出んとあかん場合も多い。それに現場から現場に移動するんにいちいち電車やバスを利用することはでけへん。そんでわしらは、朝早うから執行があつたり件数が多いときには、個人タクシーを必要な時間、借り切ることにしてたんやが、その運転手が小山さんやった。

小山さんは、大阪なんばの結構大きな家具問屋の次男坊に生まれたんやが、賭け事、特に競輪に目がのうてな。親父さんと反りがあわんことも手伝うて家出して、全国の競輪場を渡り歩きながら渡世をするようになった。そりゃア、そんな生活してたら親の死に目にも会えんわな。おふくろさんは胃がんで死にはったんやが、そのことを小山さんが知ったんは、おふくろさんが死んで2年後のことやった。小さいときからお母さんっ子やった小山さんにとって、さすがにこれにはこたえてな。大阪に帰ってきて、おふくろさんの墓前にぬかずいて、これからはきつと正業につきます言うて誓いを立てはったんや。

ひょろとした体つきで上品な面立ちをしてはったが、前歯がぼろぼろに欠けてたから、笑うとその歯が歯茎ごと表に出て、その上品な顔立ちを台無しにしてたわ。

強制執行の現場は、揉め事が何もなかったら、人足が家財道具を外に運び出すまで手持ち無沙汰なもんや。そういうとき、わしはよう小山さんからこれまで渡り歩いてきた全国の競輪場や競艇場、土地土地の風物、博徒の話なんかを聞いた。特に博徒の話になったら、話の頭に「そいつ

はホンマ、やたけたな奴でなァ。この話を聞いたら河童さんもびっくりすんで」言う枕言葉をつけて熱心に話し始めるんや。

今日び、やたけたなんて言う言葉を使う大阪人はほとんどいてへんやろ。ひろくん、この言葉、聞いたことあるか？ そりゃそうや。知らんで当然や。まあ、大阪弁でメチャクチャなとか突拍子もないとか言う程度の意味や。小山さんがこの言葉を口にして博徒なんかのことを話し出したら、それこそその人がホンマに目の前にいるみたいに生き生きと話しはって、いつもわしは聞き惚れたもんやった。

そうやな、俳優やったら誰がいいやろ。もう、物まねできる俳優はほとんど出し尽くしてしもたしな。うーん、もう1回、ここはわしの得意な橋爪功でいってみよか。

まあ、こんな具合や。

「そいつはホンマ、やたけた奴でなァ。この話を聞いたら河童さんもびっくりすんで。誰がつけたんか『咆哮の政』いうんがそいつのあだ名よ。親孝行の孝行ちゃうで。雄たけびの咆哮や。こ難しいけど粋な名前やろ、なあ、河童さん。

四国の観音寺を根城にしてる博徒だよ。博徒いうてもやくざやないで。もともとは八百屋の親父やったんやが、碌に仕事もせんと競輪や競艇ばかりやって売り上げを食いつぶすもんやから、嫁さんに愛想つかされて逃げられてよ。それでも博打がやめられんでな。八百屋を借金のかたにとられて、ほんで昔の遊び仲間を頼っての屋に入って、ほそぼそと露天商みたいなことして凌いでたな。

わしと一緒に特に競輪が好きだよ。わしもびっくりするぐらい、よう選手のこと細かに研究してたわ。けど、毎日のように競輪場に通てんのに、ほとんど車券は買わへん。見るだけよ。ほんで2ヶ月に1回ぐらい、ここぞと思うときに大きゅう賭けるんや。

そういうときは、いつもと政の雰囲気が違うからすぐわかった。チャリが一齐に走り出したら、最初、政はフオー、フオーいう小さな声を口の中で繰り返しながらレースを見つめてよ。その声がチャリの周回毎にだんだんだんだん大きゅうなるんや。ほんで鐘がカンカン叩かれて最終近うなったら、野獣の雄たけびみたいによ、ウオーッという声を、政が腹の底から絞り出す。ホンマ、それがまた人間技とは思えん声でな。地鳴りがするみたいなその声にこたえるように競輪場の観客が総立ちになる。そしたら前から3、4番手につけてた、政が車券を買った選手が、穴をこうぐっとおっ立ててスーッと外側に流れてよ、そんで一気可成にまくるんや。そりゃァすごい。獲物を狙う鷲みたいだよ。こいつのどこにこんな力が隠れてたんや思うぐらいに、一瞬をとらえて、こう穴を左右に大きゅう振ってぐーっとまくりあげるんや。そしたら政の声が一段と大きゅうなって、それに応えるみたいにチャリが左右に揺れてな、ホンマ、政と選手が一心同体になるんや。そんでバンクを揺るがす歓声の中を、馬やないがまさに鼻差で駆け抜ける。一瞬、競輪場が水を打ったようにしーんと静まり返ってな、そしてまたざわつきはじめて、電光掲示板に着順が出たら、バンク全体がどよめくんや。そりゃァ、すごいぜ。そういうときはわしも手にじとっと汗をかいて、体がブルブル震えてよ。酔いしれたみたいでもうたまらんかった。

河童さんには信じられへんやろ。けどこれがあるんや。毎日毎日、選手の穴、追っかけてよ、その走りを嫌なるほど見てたら、そいつがその日、どんな走りをするんかがはっきり見えてくる

瞬間があるんやな。一発勝負の政はその瞬間をつかまえて、そんで一発勝負を賭けるいう訳よ。博打好きやったら、毎日、ちょびっとずつでも賭けるもんやけどよ。政は絶対そういう賭けはせえへん。とにかく一発勝負しかせえへんのや。そんでもって必ず当てるんやからな。これぞホンマに勝負師やで。咆哮の政。懐かしいなァ」

まあ、こんな具合や。

わしは、小山さんと妙に気が合うてな。小山さんはようわしに1人息子の自慢話をした。

タクシーの正業について5年後に、縁あって旅館の仲居をしてた今の奥さんと遅い結婚をして、50歳の声を聞いた年に産まれた子どもや言うてた。わしと小山さんが知り合うたとき、小学校に入学したとこや言うてたな。小山さんはわが子のこととなったら、顔をくしゃくしゃにしてこんな風に話すんや。

「トンビが鷹を生むいうんはこういうことを言うんやろなア。わしはこんなやくざ者やし、嫁さんは元は風俗で働いてて誰にも相手にされへんようになって旅館の仲居をしてたような女や。その2人からこんな子が生まれるとはよ。まだ小学校に入ったばかりやいうのに、わしらできそこないの親を気遣うてくれてよ。昨日なんかも百貨店のおもちゃ売場でものほしそうにおもちゃを見てるから、これほしいんか、買うたろか言うたら、あいつ、何言うたと思う？ 首を横に振ってこうや。父ちゃん、こんなんいらん。欲しゅうなったら自分で働いて買う。河童さん、小学生1年生やで。信じられるか。この子は大きゅうなったらどんな人間になるんやろなあ」

小山さんは、余程、子どものことが好きやったんやなア。

話はちょっと変わるけど、わしは昔は溪流釣りが好きでな。小山さんからあるとき、もう使わへんから言うて立派な釣竿をもろうたことがある。滞納整理班から他の部署に異動してのちのことやったが、小山さんが胃潰瘍で入院したと噂に聞いたわしは、そのもらった竿を持って滋賀県の安曇川上流に釣りに行ってな。そこで釣ったあまごを川原で焼きがらしにして、それを持って病院に見舞いに行ったんや。

そのときの小山さんの喜びよう言うたらなかったな。今でも忘れられへんわ。

「河童さん、ホンマにわざわざきてくれはったんでっか。そりゃア、嬉しいなア。さっきまで嫁さんと坊主がきてくれてたんやけど、ちょうど帰ったとこだよ。残念やなア。嫁さんはともかく坊主は河童さんに会わせたかったわ。へえっ、これがわしが河童さんにあげた竿で釣りはったあまごの焼きがらしでっか。川辺で2時間も焼いてくれはったんでっか。これはホンマにうまいやろなア。じゃあ、ちょっといただきまっさ。ああ！ やっぱり旨い。鮎なんか比べ物にならん。こんなうまい焼き魚を食べるんは生まれてはじめてや。ホンマに河童さん、ありがとう」

けどな、小山さんはその1ヵ月後に死にはった。侘しい葬式でな。小山さんが住んでたアパートの自治会の会長さんがいい人で、葬式一切を仕切ってくれはったんやが、その自治会長さんに聞いてみたら、実は小山さんは独身でな、子どもがいてる言うんは嘘やった。病気もな、胃潰瘍なんかやない、末期の胃がんやったんや。

まさにやたけたな人生を送った小山さんやったが、その心ん中には人並みに結婚して子どもを育てたい言う思いが、おふくろさんへの思慕の情と一緒に密かに息づいてたんやろな。その思いがきつと、おふくろさんの墓の前で正業に就くことを小山さんに誓わせたんやろ。けどその願いは遂にかなわなかったんや。ホンマ、かわいそうにな。

ホンマ、あの頃を思い出すと、やたけたな言う言葉を枕詞にして、山ほど脚色つけて臨場感豊か

に博徒の話をわしに聞かせてくれた姿が、今でもわしの臉に浮かんでくるんや。

忘れがたい2人目は澤田先生や。先生は、週1回、午後半日、市営住宅の法律問題について職員の法律相談に応じるために、公営住宅課にやってくる市の顧問弁護士やった。年の頃は60代後半。年齢にそぐわん黒々とした頭髪をきれいに73に分けてな。小柄な体を前かがみにしながら右肩を落として、せかせか歩く癖が特徴的やった。

先生は、正午過ぎに公営住宅課にやってきて、ほんで職員と碁を打って、ほとんど誰もけえへん相談室で暇をもて余りながら半日を過ごすんや。ほんで、夕方、担当職員を誘うていつもの居酒屋で酒を飲み、その後、先生御用達と決まった安スナックに流れて古い演歌をたっぷり歌う。

家賃滞納問題が市議会で持ち上がって、行政が本格的にこれに取り組もうと決めたとき、法的対応を必要とする滞納件数は1000件を優に越えててな。ほんで、その対応を澤田先生にお願いしてはどうやいう話が課内で持ち上がったんだが、日頃の先生の仕事ぶりを知ってる誰もがそりゃアあかんわ言うたから、その仕事は、市に就職して数年後に司法試験に合格して、弁護士に転身した新進気鋭の鈴木先生に委任することになった。

滞納の事実そのもんを争う滞納者はほとんどいてへんから、家賃支払い住宅明渡し訴訟は軌道に乗れば簡単なもんや。弁護士報酬は、1件でみたら、着手金、成功報酬合わせて10万円と安かったけど、件数を積み重ねたらかなりうまみのある仕事や。

澤田先生はそこに目をつけはった。これは苦労して道筋をつけてきた鈴木先生にしてみたら、とんびにあぶらげを浚われるようなもんやが、なにせ件数が膨大やからな。そのうちの数10件を澤田先生に担当してもらうことになったんや。

澤田先生に訴訟を依頼するとなると、これまで法務相談担当職員が嫌々ながら付き合ってきた居酒屋での先生の愚痴聞きと演歌の付き合いが滞納整理班の職員に回ってくるんは目に見えていたから、滞納整理班の誰もが先生への訴訟委任を嫌がってな、結局、担当者の中でも1番年若のわしが担当してる住宅の訴訟を先生に委任することになったんや。

澤田先生の事務所は、今はもう取り壊されて近代的な中層ビルに変身してるけど、裁判所近くのオンボロ木造2階建てビルの2階にあった。ギーッと軋む玄関を開けたら受付があって、そこに座っているんは老婆と呼ぶにはやや早いけど、かなり高齢の女の人で、その人こそ、何を隠そう、先生が華族の末裔やといつも自慢してはった澤田先生の奥さんやった。

初めて事務所に行ったとき、こんなとこに弁護を頼みにくる依頼人なんかいるんやろか、そう思ったことをよう覚えてるわ。

けどな、先生はもともとは優秀な裁判官やったんや。酒を飲みながら、小さい顔ん中にトンボのような目をクリクリさせて、標準語に大阪弁の混じった物言いをしながら、先生はよう世間や自身のことをグチりはってたなあ。

先生役ならこの人しかいてへんいう俳優がいてる。もう80歳は越えてるやろけど、今でもときどきテレビに出てるで。そういやア、最近、コマーシャルにも出てたなあ。

「私の声は昔から演劇向きではないと言われてきました。しかし好きこそ物の上手なれ。こうして頑張ってきたのです」

お、わかってくれたか。そうそう大滝修治や。声に特徴があるから直ぐにわかるわな。

大滝修治の物まねで澤田先生をやったらこんな具合や。

「グジャクジャいうても始まんけど、河童さん、世間にはようよう注意せないけませんよ。私もこれまでいろんな目におうてきました。1番えらい目におうたんは戦争中のことです。私はこれでも東大卒でね、今の私を見たら、そりゃあ東大でも灯台違いやろなんてふざけたこという輩がいますが、ホンマもんの東大です。在学中に司法試験に受かって、卒業後裁判官になったんです。しばらく日本で裁判官やってたんやけどね。満州国が建設されたとき、そちらの裁判所に異動したんですよ。けど好きで行ったんやない。上司に箔をつけてこい言われてね。それが運のつきですわ。日本が戦争に負けて極東軍事裁判で有罪を宣告されちゃって、拳句の果てはシベリア抑留や。あれは辛かった。飲み食いもままならず体重が10キロ近く落ちてね。毎日毎日寒い中で囲碁ばかり打ってましたなァ。なんというても戦犯やから日本に帰ってきても裁判官には復帰でけへんでね。弁護士になったんはよかったけど、弁護士言うて偉そうにしてても、なんのことはない、商売人やからね。うまいこと顧客つかんで上手に立ち回らなんだら、すぐに依頼はこなくなってしまう。私は、どうも根が正直もんやから顧客とトラブル起こしたりしてうまくいかんでね。ほんで、結局、こうしてちょぼちょぼ市に食わしてもらってるいう訳です。1人息子がいてね。これが東大を卒業したんはいいんやけど、司法試験をよう通らんのですわ。もうかれこれ10年近く東京で司法浪人してて、これが悩みの種なんです。家内はいいとこの出でね。華族の末裔です。大阪くんだりまで都落ちして、なんであんたみたいな人と一緒にならなあかなんだんやろ。こんなはずやなかったってようぼやいてますわ。もちろん東京弁でやけどね。私は家内には頭が上がりなんです。よう愚痴は言うけど、なんか生まれ持って備わった気品いうもんがあってね。ぼやかれても気品のあるぼやきってこういうもんなんやろなァってつい感心するんですよ。ええ、私はね、ホンマに家内を尊敬してます。けど、私は家内と違って大阪が好きでっせ。大阪はホンマ、人情味に溢れてる。そこがいいんです。まあグジャクジャいうても始まん。さあ、調子もでてきたし、ほなら河童さん、カラオケを歌いにいつもどこに行きまひよ」

はじめは、なんでこのわしがこんな先生のお守りをせなあかんのやて腐ってたけど、わしは澤田先生と付き合ってるうちになんとなく先生のことを好きになってきた。グジャクジャいうても始まん言いながら、グジャクジャ言うのはいつも先生の方やったが、とにかく根が真っ正直なんやな。

あるとき、先生から直ぐに事務所にきてくれという電話がかかってきたことがあって、何事やろ思て急ぎ事務所に駆けつけたら「まあ、そこに座れ」とわしを促して、唇を震わせながらこう言いはったことがあった。

「今朝、神田住宅の滞納者の口頭弁論があつてな。あんたの言うてた、ほら、あの母子家庭や。3歳ぐらいの子どもさんを連れて法廷に出てきて、聞くと、4年前、今のお子さんがお腹の中にいるときに府営住宅を追い出された言うやないか。住宅を出た後、お腹には子どもがいてるから働くこともできんで、なんとか福祉の世話になって市営住宅に入ったそうやが、生活が苦しゅうて、つい、また滞納したんやそうや。あんたらこれ聞いてどう思う。これは滞納者の盪廻しや

ないか！ あんたらは社会のひずみがこんなところに現れているんがわからんのか！ これは弱者いじめ以外の何物でもない。行政がこんなことしていいと思てんのか！ あんたたちのやり方は絶対に間違ってる。そやからこの事件は私の一存で取り下げてきた。これがもらった着手金や。これは返す。とっとと持って帰れ！」

確かに、その頃、公営住宅で滞納者の監廻しみたいな現象が起きていたんも事実で、それが社会のひずみ、弱者いじめで言われたらそれはそうには違いなかった。けどわしらの仕事は、滞納者の強制執行であって社会のひずみの是正やない。そんな割り切りがなければこの仕事はでけへんのや。

先生の剣幕を聞きながら、先生がときに依頼者とトラブルを起こすいうんはこれやと気づいたけど、ここで先生とやりあえば、先生は課長のところにこのまま真っ直ぐ飛んでって持論を展開し、あとから、いったいおまえは先生とどんな調整をしてるんやとお目玉を喰らうことになるやろと直感して、あんときわしは口をつぐんだんやった。

けど、困った先生やなあと苦々しゅう思いながらも、わしは先生を憎む気にはなれへんかった。いや、むしろその真っ正直さ、世渡り下手さがますます好きになったもんや。

グジャグジャ言うても始まらんがといいながら、グジャグジャ世間や息子や奥さんの愚痴を言うたあと、美空ひばりのりんご追分を妙な節回しをつけながら情感たっぷりに歌うて、その声に1人酔いしれてた先生の姿が、今はいかにも懐かしいわ。

どや、その筑前煮。なかなか旨いやろ。鰹節、袋に入ったやつやないで、錦市場で買うてきた鰹節を削ってな。その鰹節と昆布で出汁を取る。牛蒡と人参を乱切りにして、蒟蒻は手でちぎってな、鶏肉はモモ肉を1口大に切る。鶏肉からもいい出汁が出るんや。今日は入ってへんけど、筍もあつたらゆうことないなァ。

厚手の鍋に油を引いてモモ肉を炒めた中に、蒟蒻と野菜を入れて酒を回しかけ、じっくり炒め合わせてな。そこに汁をひたひたに注いで沸騰してきたら丁寧に灰汁を取り除きコトコト煮る。筑前煮の出来上がりや。

ビールがもうないな。ひろくん、そろそろ焼酎にしようか。お〜い、かあさん。焼酎とコップ持ってきてえな。湯割りやない。2人ともロックや。水も頼んだで。それにするとピーナッツもな。

忘れられへん3人目は、スナック「チロル」のなおみママや。チロルのことはこれまでのわしの話の中に何回か出てきたから覚えてるやろ？ そうそうわしがやっさんにいちゃもんつけられたそのスナックや。

わしは、ママには、ホンマ、ようしてもろたのに、その恩を仇で返すようなことしてしもたから、そのことはあんまり話したくないんやけど、ここまでのいろんな思い出を話してきたんやから、これだけ黙っとく言うんもようない。思い切ってひろくんに聞いてもらおか。

なおみママは、鹿児島出身でな。まだ物心のつかん小さい頃に両親と一緒に京都に出てきた人やった。華奢な体つきをしてて、美人というほどやないが、笑うとその下膨れの頬に笑窪が浮かんでな、その表情が男心を蕩けさせるんや。ママ目当てにチロルにくる客も仰山いてたわ。

社長はママの顔を見たら、露骨に下ネタ話ばかりをするんで、それが心底ママには頭にくるようやな、「もう2度とこの店にこんといて！」言うて怒りを爆発させたことが何度もあつたなァ。まァ、社長はそんなママの様子を楽しんでたんやけどな。

わしが色気を出して、チロルにバイトにきてた八重ちゃんにちょっかいを出そうとしたとき、「河童ちゃん、八重ちゃんはやめとき。とても河童ちゃんみたいな素人の手に負える子やないわよ」言うて、本気になって諫めてくれたこともあつたなァ。ホンマ、1本木で正義感が強い人やった。

滞納整理班にいた頃は、ホンマによう社長や山本さんらとチロルに行ったけど、他の部署に異動したあとは、わしは強制執行の仕事から離れたいという思いが強かったから、行ったら社長やみんなに出くわす恐れのあるチロルに足を踏み入れることはのうなつた。

チロルから足が遠のいて3年後のことや。わしが体調を崩して森之宮の成人病センターに診察に行ったとき、待合室で、偶然、ママに出会うたんや。久し振りやったから懐かしゅうてあれこれ近況を尋ね合うた後、ママにどこか悪いところがあるんか聞いたら、だんなが難病に罹ってる言うやないか。不知の病で、もうかれこれ20年近くも療養生活を送ってる言うことやった。

その話を聞いたとき、わしは返す言葉を見つけることができんで黙っていると、逆にママがわしを

慰めてくれてな。そんでその日は別れたんやったが、そのことが記憶に残ってたからやろな。数週間後に京橋で開かれた職場の懇親会の後、わしは後輩3人を誘うて3年ぶりにチロルに流れたんや。

カラオケを歌うて、ウイスキーを何倍ぐらい飲んだやろなア。帰り際に勘定を聞いたら3万円や言う。後輩にはここは自分の店やとの触れ込みで入ったもんやから、勘定はわし持ちやが、あいにく財布には1万円しかなかった。そんで、わしは必ず近日中に持ってくるてママに耳打ちして店を出たんや。

それから、忙しさに取り紛れているうちに1ヶ月が過ぎ、半年が過ぎ、1年が過ぎてしもた。ママから請求書が届いたんは1年半ぐらいが過ぎてからのことやったな。けどわしは、呑み屋のつけを今頃になって請求してくる方も悪い言うて勝手な理屈をつけて支払いに行かへんかった。

その2年後のことや。ママから手紙に同封して請求書が送られてきたんは。読んで見ると、店の経営が苦しいこと、だんなさんの病状がおもわしゅうのうてお金がいることなんか、便箋3枚にびっしりと書かれてるやないか。

3万円ぐらいの金で、こんな長文の手紙を書いてくるいうんは、ママはホンマに困り果ててるに違いない、そう思たけど、わしはこのときも支払いに行かへんかった。その頃、わしも金がのうてな。その3万を支払うんが惜しかったんや。

バブルが弾けたあと、キタとミナミの繁華街は灯が消えてしもてたから、チロルの経営が窮地に陥ってることは容易に想像でけたし、だんなさんの病気のことも成人病センターで偶然出合うたときに聞かされていたにも関わらず、わしは我が身かわいさにママの窮地を無視してしもたんや。

それから、なんかの拍子にママからの手紙を思い出しては、こんなんじゃあかん、チロルに金払いにかなあかんて思てたんやけど、今更、どの面下げていけるんやいう思いも強うて、どうしても足がチロルに向かなんだ。

いつやったかなア、それから何年かしてから、なんかの機会で京橋に行ったとき、酔いも手伝うて、フツとチロルに寄ってみようという気になって行ってみたんや。そしたら、ビル自体が取り壊されててチロルはもうのうなつた。

寄ってみようとは思たもんの、ママに会うたらどんな顔して、何言おう、嫌やなア言う思いも強かったから、チロルがそこにもうのうなつてることがわかったときは、正直何かホッとした。けど反面、取り返しのつかんことをしてしもたいう後悔に、なんとも複雑な気持ちやったなア。

わしは、ママの手紙のことを思い出すと、今でも自分自身に「この人非人！」言う言葉を投げかけることにしてる。ほんでちょっとでもいい、何か世間のためになることをせんとあかん思うんや。贖罪いうたら大袈裟やけどな。

この話をするんは、実はひろくんが始めてやねん。なんでひろくんに話す気になったんかなア。そんなん、たいしたことやない言う人も多いやろけど、まア、これはわしが死ぬまで心ん中で消すことのでけん、ちょっと辛い思い出の1つやな。

ちょっと話が湿っぽうなってしもたな。もう1人、忘れられん人がいてるんやが、これはちょっと笑える話や。その人のことを聞いてくれるか。

わしが滞納整理班に在籍したんは、29歳から34歳までの5年間や。男のこの年頃は、世間でいえば結婚適齢期やな。

ところで、公営住宅課には今でもアルバイトの女の子が仰山いてるか？ そうか、たった3人しかいてへんのか。えらい減ってしもたもんやな。わしがいた頃は、入居者への納入通知書の発送とか各種お知らせ文書の送付なんかの単純反復作業が仰山あったから、他の部署に比べて若い女の子のアルバイトが格段に多かった。多分、10人は超えてたやろ。その女の子を見に他の部署からやってくる若い職員もいたほどやった。

わしは、このところ栄養が全身に行き渡って、局所的な集中もみせて「河童の太鼓腹」なんて皆にからかわれてるけど、当時は中肉中背のスリムな体つきをしてた。けど、顔つきはそう変わるもんやない。ほれこの通り、ダンゴっ鼻の下に歯茎が浮き上がって、あの道頓堀の食い倒れ人形のようなゲジゲジ眉や。ほんで顔の左右がちょっとややグイチときてる。まあ、典型的な3枚目やな。

それでも、気性に男っぽい骨太さでもあれば女にはモテる。けど、わしは男に生まれてきたことを後悔はしてへんけど、女に生まれてきた方がこの身に合ってるんやないかと感じることが昔からようあった。聞こえたら大変やが、うちの母さんとはまるで逆やねん。

料理や家事をしてたら、何かこう落ち着いて寛ぐことができるんや。それにどうも気弱でな。つまりは外観、性格ともに女にもてるタイプからは程遠い言うこっちゃ。

それでも、わしは男や。それにあの頃は若かったし、人一倍異性に対する関心も強かった。そんなわしが好きになったんは、家賃収入班のマドンナ、ゆりちゃんこと田辺百合子さんやった。小柄やったけど抱きしめたら弾けそうな均整のとれた体つきしてて、吉永小百合を思わせる面長のべっぴんさんでな。肌が透き通るように白かったなァ。

わしは、ある日、ゆりちゃんへの募る想いを押さえきれんと、思い切って恋文を書いた。その恋文、母さんにわからんように戸棚の中に今でも入れてんねん。ちょっと待ってな。出してから。

あった、あった。これやこれ。久し振りに読んで見るわな。

目を細めてコロコロ笑う そんなあなたが好きです

はにかんでポッと頬を赤く染める そんなあなたが好きです

憂いを瞳に秘めて遠くに視線を投げている そんなあなたが好きです

真顔になって真剣に皆の話を聞いている そんなあなたが大好きです

悲しみを瞳に浮かべて去る人を見送る そんなあなたが大大好きです

ぼくの心はあなたへの想いで張り切れんばかりに膨らんで、プカプカ空中を漂い、あなたの周りを回って、あなたのことだけを見つめています。

大大大好きです。ご返事を待っています。

なんとも我ながら照れくさいなァ。わしもあの頃は純情可憐な青少年やったんや。そう笑わんといてな。

朝早う出勤してな、机の引き出しに入れたもんやどうか迷いながら、しばらくゆりちゃんの机の辺りをうろちょろしたあと、意を決して机の中にこの手紙を入れたんや。

その日は心臓がバクバク鳴って、仕事が手につかんかったなァ。山本さんが、「河童、熱でもあるんちゃうか？」いうて怪訝がり、原さんが、「おまえ、ちゃんと人の話、聞いてんのか！」言うて怒鳴っても、わしは心ここにあらずで、ゆりちゃんがどんな表情でわしの手紙を読み、どんな反応を示すんかが気になって仕方がのうてな。1日中、熱に浮かされるようにして過ごしたんやった。

ゆりちゃんからの返事を、総務班にいたアルバイトのおしゃべり順ちゃんが持ってきたんは1週間後のことやった。折り畳んだ短冊型の紙を開いたら、ごめんなさい。お気持ちは嬉しいのですが、私には付き合っている人がいます言うて書いてあった。

わしは、このときばかりは、こんな風に誰にでも開き見ることのできる紙を、おしゃべり順ちゃんに渡して、さりげのう自分のモテぶりを披露するゆりちゃんを憎んだもんや。

案の定、ゆりちゃんへのわしの付文は、数日後には皆の知るところとなって、わしは、しばらくの間、誰かと視線が合うたびに冷笑されてるようで、職場に出るのが、ホンマ辛かった。

一気に浮かされた熱は冷めるんも早い。しばらくして、わしは滞納整理班に配属されてきたさっちゃんこと北裏早苗さんに恋をした。さっちゃんは、市内のある病院で看護婦をしてたんやが事情があってそこを退職し、市にアルバイトにきた女の子やった。ゆりちゃんに振られて落ち込んでるわしをさりげのう慰めてくれてな。偶然、帰り道が一緒になったときに声をかけて食事をしたんが付き合うきっかけやった。

わしより3つ年下の、どこかに童顔を残した、笑うと笑窪のかわいい女の子やった。交通事故で死んだお兄さんの面影をわしの中に追うた言うんは、後日のさっちゃんの弁やが、そんなことを知る由もないわしは、なんでこんな男にさっちゃんが心を寄せてくれたんか不思議に思たもんやった。まァ、蓼食う虫も好き好き言うからな。

聞いてみたら、さっちゃんは市内の個人病院に勤めていたんやが、副院長が横暴な男で、セクハラまがいのことをするんに嫌気がさして、新しい職場を見つけるまで、府にアルバイトにきた言うてたな。

市に来ている女の子はみんないい男を見つけにきてるんとちゃうのん？てわしが言うたら、さっちゃんは真顔になって、私はそんな女やない。ちゃんとした仕事を早う見つけて働こう思てる！て怒ってた。わしは、人生に対して正直に、真面目に対面するそんな姿に好感を持ったんや。

さっちゃんをラブホテルに誘うた日のことは忘れられへん。あれは桜の宮の造幣局の通り抜けに2人して行ったときのことや。仕事帰りに待ち合わせて、芋の子を洗うような人ごみをいいことに、ことさら体を寄せ合いながら、わしらは天満橋から桜の宮に向けて歩いて行った。

通り抜けの終点近くからは、川を隔ててちょっとの間にラブホテル街の灯が見えてる。わしはそ

の灯を見ながら、声を上ずらせてさっちゃんをこう誘うたんや。

「あ、あっこの、ホ、ホ、ホテルに入って、ち、ちょっと休もか」

ちょっとでも早う入りたいのにホテルはどこも満室でな。さっちゃんの心変わりを心配しながら3軒目のホテルに入って、満室の表示に落胆して外に出ようとしたら、さっちゃんの足が突然止まった。おかしいな思いながらその視線の先を辿ってわしも驚いたのなんの。こちらに向かって歩いてくるんは、あれは同じ課の住宅改修班の山田班長とゆりちゃんやないか！ 山田班長は妻子持ちやが、スラリと背の高い優男でな、プレイボーイとの噂が高かった。

さっちゃんに袖を強う引っ張られて、ホテルの入口の物陰に身を隠したわしらの前を2人が通り過ぎて行った。いかにも手馴れた感じで、山田班長はゆりちゃんにこやかに話しかけてな、これにゆりちゃんが静かに頷き返してた。その2人の姿をわしらは食い入るように見つめたんや。

「わたし、帰ります」

行く手のホテルの中に消えて行った2人の姿を見送ったあと、さっちゃんはわしにそう言うた。

「ちょっと待ちいな」

わしのその言葉はさっちゃんに届いたかどうか。そのときはもう、さっちゃんはわしの制止を振り切って通りに駆け出したあとやった。

置き去りにされて、わしは2人の入ったホテルを1人見上げたんやったが、そのまばゆいばかりのイルミネーションがなんとも恨めしかったんを、昨日のこのように思い出すことができるわ。

さっちゃんて誰のことかわかるか。何を隠そう、今のうちのかあさんや。ははは、ちょっとはびっくりしたやろ。

これでわしの話はしまいや。

考えてみると、もうあれから40年近う月日が流れて、わしも70に手が届くところまできてしもた。在職中は、行政マンとして数々の職場を渡り歩いて、いろんな経験をさせてもろたが、その中でも市営住宅の強制執行の仕事は特に異彩を放ってるな。

わしは滞納整理班に5年在籍したんやったが、4年目あたりから、早うこの仕事から足を洗うて新しい職場に転職したい言う思いが強うなってきた。

行政マンとしてもっと行政らしい仕事をしたい言う思いに加えてな、なんか長年月のうちに皮膚にへばりついて、澱のように気持ちん中に積み重なった滞納者の憎しみや恨みなんかの負の感情に狎れてしもうて、強制執行をなんとも思わんようになってきている自分自身が怖うなったんや。

6年目にやっとわしの望みは叶えられて、わしは他の部署に転職した。新しい職場は忙しかったし、当時は、強制執行から完全に離れたい言う思いも強かったから、転職してから、わしは滞納整理班に顔を出すこともなく、山本さんや岡さんとの交流も絶って、転職当初は頻繁にかかってきた社長からの飲み会の誘いも断り続けた。

そのうち、社長からも山本さんや岡さんからも誘いがのうなって、10数年が過ぎたある日のことや。職場に岡さんから電話が入った。お互いに久しぶりやなァて話したあと、要件を尋ねたら

、なんと社長が死んだという連絡やないか。肝硬変ということやった。

その日の夜の通夜には、当時の滞納整理班の懐かしいメンバーが集まったんやが、貫太郎さんと奥さんはきてへんかった。聞いてみたら貫太郎さんはどこへ行ったか行方知れずで、奥さんは本妻さんに遠慮して参列してへんということやった。どこまでも日陰の身に甘んじられたんやな。

わしらは、通夜の後、居酒屋に入って酒飲みながら、当時を振り返って思い出話に花を咲かせたもんや。

「社長は、ホンマ、面倒見のいい人やったよなア。酒が切れたら手が震えて文字が書けんもんやから、執行の現場で、ちょっとこれ書いといてくれ言われて、代わりに領収書にサインしたことがようあったわ。あの領収書は法的に有効やったんやろか？」

「ほうか。貫太郎さんはどこに行ったかわからんのか。あの人のこっちゃんから今でも日銭を稼いでは西成の安旅館で飲んだくれてるんちゃうか。けどホンマに執行現場での貫太郎さんの働きはめざましかったよなア。あの年で団地の階段を猿みたいに上り下りしてた姿が今でも目に浮かんでくんで。まだ元気やったらええけどな」

「やっぱ、奥さんは本妻さんに遠慮しはったんかなア。けど、今日の通夜に本妻さんはいてなんだんちゃうか？ え？ 奥さんは本妻さんの子どもに遠慮したんやろうって。そういやア、長男さんが喪主いうてたな。学校の先生で熱心なクリスチャンなんやろ。わしがこんな因果な商売してるから、あいつはそれを反面教師にしたんやって、社長が笑いながらよう言うてたわ」

「小山さんのことも懐かしいなア。今頃、社長があっちへ行ったんで小山さんも喜んでるやろ。小山さんのやたけたな博徒の話はおもしろかった。もう1回聞いてみたいよなア」

「そういやア、河童に1人面倒みてもろた澤田先生はだいぶん前に死にはったらしいで。当番の日には昼過ぎにきて職員と碁を打ってた姿が懐かしいなア。結局、息子さんは司法試験に通らなんだらしい。それに奥さんが華族の出いいうんは真っ赤な嘘やったらしいで。なんでも先生は、東京の町工場の社長の1人娘の婿養子やったという話や。東京やたらうまくいったかもしれんのに、澤田先生はなんで大阪くんだりまで流れてきはったんやろなア……」

てな具合や。

その社長の野辺送りをしてから、数えてみると早20年近うも経ってしもた。まだ、奥さんと貫太郎の訃報は届いてへんけど、もう多分、2人ともこの世の人やないやろ。

わしはな、この頃、よう思うんや。どんなに平凡な人生でも、その人の生きた軌跡や心のあり様を、そっくりそのまま文章にして出版したら、それは全部ベストセラーになるに違いあらへんってな。それほどに人の人生いうもんは、まさに十人十色で、他人からみれば、みんながみんな、小山さんの表現を借りたら、やたけたな部分をもって生きてるんや。

社長、奥さん、貫太郎、小山さん、山本さんに岡さん、そして澤田先生。ホンマ、やたけたな人生の大集合やないか。ひろくんもそう思えへんか。

深酒をするとな、ときに社長やあの頃みんなの面影が脳裏に浮かんできて、わしは胸を締め付けられるようなときがある。そういうとき、わしは社長や奥さんに、もうちょっとこっちの世界にいるさかいそっちでしばらく待っててやて、呼びかけることにしてるんや。

あんまり思い出に深く漬かるんはやめんとあかな。けど、厳しゅうて、悲しゅうて、懐かしいあの頃、あの人たちではあるよなア。

ありゃ、話してるうちに、もう、8時やないか。ひろくん、そうや、今日はこちらに泊まっていけへんか。えっ、咲子が心配するって？ なんや、ええ大人が。子どもやあるまいし。けど、ホンマ、親子で仲いいなア。ええこっちゃん。

ほなら、前みたいに蕎麦作るから食べていき。お隣りの山田さんが、先週の土日に山陰地方へ旅行に行きはって、おみやげに出石の蕎麦をもらたんや。これはうまいぞ。まあ、ちょっと待っててや。すぐ用意するさかい。

お、ひろくん、今日はまたどうしたんや、市役所まできて。えっ、相談したいことがあるって？ そうか、知っての通りこのわしは非常勤やから、あと10分ほどで仕事が終わるよって、そのソファでちょっと待っててくれるか。そんで一緒に屋上の喫茶店にでも行こか。ここら辺はビルの高さを制限してて、この市役所がダントツに高いからな。屋上に上がったら360度市内全域が見渡せてなかなかいい景色やねん。仕事、すぐに済ますよって待っててな。

どや、ここからの景色、なかなかのもんやろ。わしのもんやないけど、人を連れてきたらつい自慢したなるんや。ほら、あっちの遠くに霞んで見えるんが生駒山、そのお隣りが金剛山や。今日はちょっとどんよりしてるから煙ってよう見えへんけど、天気がよくて風の強い日なんかは、あの山並みがはっきりくっきり間近に見えてな、ホンマ、なかなかの景色やねんで。

コーヒーでええか。ほうか、お〜い、ねえちゃん、コーヒー2つおくれな。ハハハ、わしの悪い癖やねん。居酒屋でもレストランでもホテルでもバーでもどこでも、にいちゃんにねえちゃんや。

そんでひろくん、えらい深刻な顔して、今日はまたわざわざ何の用やねん。仕事で何かあったんか。それとも咲子の容態があんまりようないんか？ 電話で話したら元気そうやったけどな。えっ、何やこれは？ えらい古くさい書類やな。これを読め言うんかいな。

う〜ん、ひろくん、これ、どこで見つけたんや。そうか、倉庫の整理を命じられて見つけたんか。これやから公務員はあかんのや。こんな書類は5年で廃棄処分が決まりやで。それをなんかえらい大事な宝物みたいに後生大事に保管してるんやから。ホンマ、自分が長いことおったとこやけど、役所はかなんな。

そうや、確かにこの債務者欄に書かれてる田辺義男いうんは、ひろくんのお父さんの名前や。ほんで1番下の担当者のとこに書かれてる名前はこのわしに間違いない。

わしの家にひろくんが久し振りに訪ねてきてくれたとき、ひろくんのお父さんが死んだ訳を話したもんかどうか迷うた。咲子からは、わたしからはよう話すことでけへんから、機会があったら兄ちゃんから話したってくれ言われてたしな。

けど、わしは得意な物まねしてるうちに、その機会を見失うてしもた。わしの悪い癖でな、つい興に乗って物まねオンパレードをしてしもて、肝心なことを話さなんだからなア。けど、こんな書類がでてきたらしゃアない。今日は物まねなしで義男くんのことを話すわな。

ひろくんはお父さんのこと何か覚えてるか？ そりゃ、無理もないわな。義男君がバイクの交通事故で死んだんは、ひろくんが乳飲み子のときのことやからな。

ひろくんのお父さんはえらい男前でな。上背がある上にスタイルがよくて、ある小さな関西の劇団に入ってて将来を囑望されてた。咲子も演劇が好きで、この劇団に入ってな。そんで義男君と恋に落ちたんや。そりゃア、熱烈な恋愛やったらしい。

そうか、そこんところは咲子から聞いているか。けど、ホープいうたら聞こえはええが、劇団からもらえる出演料は雀の涙ほどやったから、生活費はアルバイトで稼ぐしかない。将来、テレビに出るとか映画に出演するとかして有名にでもなりゃア、話は別やが、そんな保証はどこにもない。それで2人が結婚したい言い出したとき、親父が猛反対した。

親父は豊職人で腕はよかったが、職人にありがちなへんこな男でな。あの頑固さにはわしもほとんど困らされたもんや。おふくろは2人がそこまで好きおうてるんやったら、一緒にしたろ言うてたけど、親父がそんな将来の不安定な男との結婚はどうしても許さん言うて強情をはるもんやからしゃアない。結局、2人は駆け落ち同然に家を出て一緒に暮らすことになったんや。

義男君もかわいそうな生い立ちでな。病院の前に産着と一緒に置き去りにされた捨て子やった。孤児院で育ったもんやから身内は誰もいてへんでな。きっと咲子とあんなに早う結婚したんも家庭の味が恋しかったんやろなア。

わしは高校生の頃、親父が嫌いデな。1日も早う家を出て1人暮らししたい思ってたから、高校を卒業したあと、市に就職してすぐにアパートを借りて、1人で暮らすようになった。若いときは親のありがたみはわからんもんや。わしも1人暮らしの気楽さにかまけて、あの頃はほとんど盆暮以外は実家に寄りつかんかったから、咲子と義男君のことも実はほとんど知らなんだんや。

アパート暮らしが7、8年を過ぎた頃、1度、おふくろから電話があって、咲子が俳優の卵と一緒にいる言うたらお父さんが怒ってしもて大変やから、おまえからもお父さんを説得してくれ言われたことがある。けど、わしの言うこと聞くような親父やない。そんなおふくろの話を知ったら、余計家に近寄るんが煩わしゅうて、わしはもっと実家に寄りつかんようになった。そやから、2人が家出同然に結婚したいうんはあとから聞いた話で、義男君がどんな男で、2人がどんな経過で好きあうようになったんか、全然知らんかった。まして2人が市営住宅に住んでるなんてことは知る由もなかったんや。

あれはもうかれこれ30数年前、このわしが30歳で、咲子が27歳、義男君が29歳、ひろくんが乳飲み子のときのことや。辛い思い出には違いあらへんけど、誰が悪い言うんやない。偶然が偶然を呼んだだけのことやと、わしは今でも思てる。

秋口に入って、ちょうど今日の天気みたいに晴れてる訳でもなければ曇ってる訳でもない、何かやけに中途半端な天気の日やった。春霞言う言葉があるけど、あれは秋霞とでも言うたらいいようなどんよりした日やったな。いや、はっきりとはわからん。あとから思い出したらそんな日やったような気がしてるだけかもしれん。

その日、小康状態を保ってて、まだしばらくは大丈夫やろ言われてた岡さんのお母さんの容態が急変してな。岡さんのことは憶えてるやろ。そうそう、当時の滞納整理班にいたわしの先輩や。主治医からすぐ病院にきてくれという連絡が職場に入って、ほんで、わしが急遽、岡さんのピンチヒッターで社長と強制執行に行くことになった。

事前に、原さんから「102号室はどうも嫁さんがだんなに滞納のこと黙ってるようや、それに乳飲み子を抱えてるからちょっともめるかも知れん」て聞かされてたから、ちょっと気が重いなア、現場で嫁さんに泣かれたらかなんなアぐらいの気持ちで、わしは堺の中山住宅の、忘れもせん102号室に社長と執行官と一緒にいったんや。

そこに乳飲み子を抱えた咲子を見たときは驚いたも何も。わしは何も言葉が出んでその場に立ち竦んだ。家を追い出しにきたんが兄貴やったから、咲子もわしと思いは一緒やったやろ。ちょっとの間、2人でじっと目を合わしたけど、わしはただただ呆然とするばかりで、咲子はすぐに下向いてひろくんを抱いたまま、椅子の上に蹲まるようにしてた。食卓には義男君が座っててな。テーブルの上の食パンと牛乳がいかにも侘しげやったな。

そんなこと何も知らん社長が、食卓に座ってた義男君に向こうていつものように「田辺さん、こちらは裁判所の執行官や。もうわかってまっしゃろ。これからこの家の強制執行をさしてもらうで」と言うたあと、執行官を振り向いて「さあ、先生、執行宣言しとくなはれ」といつもと判を押したように同じ口調で言うた。

これを聞いた義男君は、ちょっとの間言葉が出んで息を飲んだようやったが、ひろくんを抱いて俯いてる咲子を見てすべてを悟ったんやな。見る見るうちに目が赤うなって、社長と執行官に「これは家賃滞納の強制執行ですか。滞納はいくらですか。わたしには返すあてがあります。すぐにお金を用意しますよって、少しの間待ってください」言うた。けど、社長や執行官にとって、これはいつもの見慣れた光景、聞き慣れた言葉や。

社長が「田辺さん、もうここまできたら遅いんですわ。後戻りはでけへん。わしはこれまで奥さんにはようよう旦那さんに相談するんやで言うて、何度も何度もこの家に足を運んだんでっせ。あとのことは、また相談に乗るから、申し訳ないが強制執行させてもらうで」と、これまたいつものように儀礼的に答えた。

そんとき、義男君がわしを見た。わしも義男君を見た。わしは義男君のことをおふくろから聞かされてたから、こいつが咲子のだんなかいう思いやったけど、義男君の方はわしがまさか咲子の

兄貴とは思ってへんから、わしの視線の方が濃厚やったんやろな。すぐに、義男君はわしから社長に視線を戻してこう訴えた。

「そんな、ちょっと待ってくださいよ。返す当てはありますから。お金は必ず払う言うてますやんか。それも今日中に必ず払います。必ずです。今からすぐにお金の算段に行ってきます。必ず算段します。必ずです。もう少し待ってください。必ずです。お願いします」

興奮してたんやな。義男君は、やけに、必ず、必ずという言葉を連発してな。けど、強制執行はその場で滞納全額を支払わんと誰にも止められへん。それが鉄則や。もう誰にもどうすることもでけへんのや。

けど、そんなときちょっと冷静を取り戻したわしは、あることに思いついた。

この日の執行が3軒いうことは、前日に岡さんから聞かされてた。1軒目が義男君とこ、2軒目が同じ住宅の3階の302同室で、もう1軒はそこから車で10分くらい離れたところにある山手台住宅の3階の1室やった。

302号室の入居者も山手台住宅の入居者も既に退去はしてるけど、夜逃げ同然で出て行ってるから、部屋の中に家財道具がほとんどそのまま手つかずで残ってるいう話やった。

そこで、わしは義男君とやりとりしてる社長を入り口の方に呼んでこう頼んだんや。

「社長、私もびっくりしてるんですけど、あっこで乳飲み子抱いてるんは私の実の妹ですわねん。ホンマ、すみません。わかってます。わかってますよ。執行を中止してほしい言うてるんやないです。岡さんに聞いたんですけど、今日の執行はあと2軒あって、両方とも家財道具を外に引っ張りだすだけでいいんでっしゃろ。社長、すみません。そっちの2軒の執行を先にやってくれませんか。その間に私から咲子にはよう話して聞かせますよって。社長、助ける思て頼んます」

社長は、一瞬、何事やいう顔したけど、わしの真剣な顔見てすぐに事情を飲み込んでくれて、「おい、貫太郎、次んどこへいくぞ。ここはそっちをやっつけてからや。先生、すみまへんな。ちょっと事情ができましたよって、とりあえずここは中止して302号室を先にしまっさ」言うて、1人きょとんとしてる執行官を置き去りにするようにして部屋を出て行ってくれた。

こんな場面で、咲子に兄貴を紹介されてびっくりしてる義男君とのあいさつもそこそこに、わしは咲子に、「これから、かあちゃんに電話して、金、用意してくれるよう頼むから、義男君にそれを取りに行ってもらってくれ」言うて、これからは時間との勝負や思たから、「電話はどこや」て聞いたら、止められてる言うやないか。しゃアない。わしは近くの公衆電話に急いで走って、おふくろに簡単に事情を話し、金の工面を頼んだんや。

滞納は70万円近くやったが、おふくろもかき集めたらなんとかなる言うてくれてな。わしは「義男君が小1時間もしたらそっちに行くから」言うて、なんとかそれに間に合うようおふくろに金策を頼んで部屋に取って返した。

時間を見たら八時過ぎやった。親父の家までは車やったら30分くらいで行ける。けど、通勤渋滞につかまったらことや。そんで、義男君にそう言うて、「近所にバイクを持ってる知り合いがいるから、それ借りたら近道使うて30分くらいでお父さんの家に行けます」言うもんやから、わしはその提案に乗った。

9時に銀行が開いて、金の段取りに20分、帰ってくるのに30分、2軒の執行は、どっちの住

宅も3階やから2時間は優にかかる。よし、これやったら間に合うとわしは思た。

それからの2時間は長かったで。まんじりともせんと、義男君が社長や執行官よりも早う着いてくれることを祈りながら待った。けど、早かったんは社長らのほうやった。これで万事休すや思たけど、おふくろに電話をしたら、義男君が金持って家を出た言うやないか。そんで、執行官に必死に事情を話すと執行官も気の毒がってくれてな。あと30分だけ待とういうことになった。

けどな、義男君は30分経っても帰ってこおへんかった。あと30分、執行官に無理言うた。その間、わしは針の筵に座ってるようやったが、そんでも義男君は帰ってこおへんかったんや。もうこうなったらしゃアない。これ以上は待たれへんいうことになってな。とうとう執行は始まってしもた。

そんでも、わしは希望を捨てんかったで。義男君が帰ってきたらその時点で執行を中止にしてもらおう思てたんや。

執行が半分程終わって、それにしても遅いなア、バイクで行ったんやったら渋滞に会うこともないはずやのになア思てたら、家財の積み込みを指示してた社長が、「おまわりが下にきてるからちょっと来てくれ」とわしに耳打ちした。なんやろ思て行ってみると、そのおまわりさんが、わしに義男君の免許証見せて、「この免許証の方はここに住んでおられるんですか」て聞くから、「そうです。この免許証の主は確かにここの住人です」て答えたら、「先ほど、ここからちょっと向こうに行った塚本3丁目の交差点でトラックと単車の事故がありまして、単車に乗ってたこの免許証の方がトラックに轢かれて病院に運ばれたんです」と言うやないか。

びっくりしたも何も。言葉が出なんだ。とにかく病院に行かなあかん思た。

執行はもう止められへんから、社長に後始末を頼んで、わしは咲子と一緒に病院に急行したんやが、そのときはもう手遅れやった。義男くんはトラックに轢かれて即死やったんや。赤信号無視して交差点に突っ込んできたいうことやった。

住宅は強制執行されるわ、義男君は死んでしまうわ、それからの咲子の錯乱ぶり言うたら、今、思い出してもすさまじいもんがあった。ひろくん連れて死ぬ言うて泣き叫んだり、義男君とこへ行くからひろくんのごと頼む言うて2階から飛び降りてどっかに行こうとしたり、何にも言わんと、終日、じっと壁を見つめていたりしてな。おふくろは、咲子からひろくんをしばらくの間引き離して、2階に押し込めた。

咲子が立ち直るまでには、長い時間がかかったで。親父も協力してくれた。わしもしばらく実家に帰って協力したけど、もう、おふくろがへとへとになってしもてな。咲子はちょっと目え離れたら、すぐにどっかに行こうとする。死に場所を探そうとしてたんやな。よほど義男君に惚れてて、自分のしたことが許せんかったんやろ。今からは想像もでけへんけど、1時は体重も40キロ近うまで落ちたんちゃうか。

その咲子が立ち直りの兆しをみせたんは、義男君の1周忌が終わってからのことやった。義男君が咲子の夢枕に立ってくれてな。「咲子、おまえがしっかりせなんだら、ひろしはどないなる。咲子、何してるんや、しっかりせえ」て励ましてくれたんや。

咲子はその言葉を支えにしてようやく立ち直った。それからの咲子の頑張りはずごかったで。ホンマ、義男君が乗り移ったようやった。我が妹ながら女手1人でようやった思う。そんであれだけの店を持つことができたんや。

どないした、ひろくん、泣いてんのか。ホンマにな、もし、義男君が生きてたら、役者として花を咲かせることができたかどうかは、今となっては神のみぞ知ることやが、義男君は生まれも育ちも、ほんで死に際までも薄幸なことやった。

義男君の葬式の日のごとはよう忘れん。劇団員数名とわしら家族だけの侘しい葬式でな。菊の花を一杯手向けた棺桶を、蚕の戸棚みたいな焼却炉に入れて、ゴーいう音を遠くに聞きながら1時間ほど待つんや。ほんで、薄白い灰ん中から、これが喉仏で、これが頭蓋骨です言う担当者の説明を聞いたあと、骨を1つずつ拾い上げて骨壺に入れるんやが、そうしてたら、もう涙も涸れたやろ思ってた咲子が「義男さん、堪忍してえ〜」言うて声を絞り上げてまた泣いてな。わしも、兄弟の挨拶もろくに交わさんと、これが義男君との今生の別れや思たら、ホンマ、たまらなんだわ。

これで全部話したで。そんなことないやろけど、ひろくん、わしの話聞いて、咲子のごと恨んだりしたらあかんで。咲子が家賃を滞納したんは、隣近所の奥さん方と家財道具や何やの買物競争をしたからやない。ホンマに生活が苦しかったんや。バイトでもして義男君を支えよう思ても乳飲み子を抱えた体では何もでけへん。義男君も頑張ってたけど収入は微々たるもんやったからな。

酒ばっかり喰らわんと、わしにもうちょっと2人のことを気遣う余裕と甲斐性があったらよかったんやが、それも後悔あとに立たずや。

ところで、ひろくん。もうすぐ義男君の命日やんか。こうして義男君が死んだ訳を話したこと

やし、今年は咲子とうちのかあさんと4人で一緒に墓参りしよか。

実はな、ひろくんは知らへんやろけど、義男君の墓に定期的に花を供えにくる人がいてるんや。わしもこれまで2度ほど見たことがある。80歳を越えたぐらいのおばあちゃんだな。1度墓道ですれ違ったとき、よほど声掛けよか思たんやけど、逃げるようにそそくさと歩いていきはったから、声を掛けそこのうた。咲子も2度ほど、そのおばあちゃんを見たことがある言うてたな。

咲子とも話したんやが、あのおばあちゃんは、ひょっとしたら義男君のお母さんやないか思う。いや、きっとそうに違いあらへん。病院やら孤児院で義男君のこと調べて、義男君が死んでしもたこと知って、ああして墓参りにきてはるんやないか、そう思えるんや。

墓には義男君の命日を刻んでる。ひょっとしたら、今度の命日にあのおばあちゃんもきはるかも知れん。

自分の子どもを病院の前に置き去りにするいうんは、人として許されん所業やが、それをしたんは余程の事情があつてのことやろ思う。けど、どうしてもその子のことが忘れられんで、のちのちいろいろ調べて、我が子が死んだことを知ったときは、あのおばあちゃんもきっと後悔しても後悔しきれん思いやったやろ。

もうこんなに長い時間が流れたんや。墓の中で義男君もおふくろさんのしたこと許してる思う。なあ、ひろくん。もし、そのおばあちゃんに会えて、ホンマにそのおばあちゃんが義男君のおふくろさんやったら、あなたの孫はここにこうして生きてます言うて元気な姿をみせてあげよやないか。なあ、ええやろ。

島倉千代子の歌やないが、ホンマ、人生いろいろや。義男君はああいう死に方をしてしもたが、ひろくんという種をこの世に残した。ひろくんもこれから後世にその鎖を繋いでいくことになるんやろ。

この歳になるとな。達観いうそんなええもんやないが、確かにわしらは何かに生かされてると思うことがある。わしは無神論者やけど、こうして何億分の1の確率でこの世に生まれてきたんやから、生きてることをあだやおろそかにしたらあかん思う。

まあ、そんなこと言いながらも、毎晩酒飲んでたら世話ないけどな。

家に帰って、義男君のことで、咲子をあれこれ問い詰めたり、咲子の前で泣いたりしたらあかんで。ひろくんも男やろ。今日のわしの話はその臍の下的な、胆田の中にぐっと押し込めとき。

時間はあるんやろ。もうええ時間やし、駅の近くの立ち呑み屋で1杯引っかけて、そんで一緒に帰るか。

(了)

おばあちゃんへの贈り物

<http://p.booklog.jp/book/52982>

著者：田中かわず

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/1121abc/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/52982>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/52982>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ